

---

# 弥生ともう一つの世界

星原ルナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

弥生ともう一つの世界

### 【Nコード】

N6409W

### 【作者名】

星原ルナ

### 【あらすじ】

シャルロットとの戦いから数十日過ぎ、まもなく夏休みが終わるごろ、一人の少女に出会う。少女は出会って突然倒れるが、久しぶりの学校にその少女が転校してきて……。睦月の故郷やチェリーの父親など少しづつ「もう一つの世界」の存在が明らかになっていく。弥生と夢石の続編。かなり字数が増えます。

## スリジエと姉の死の通達

少女は待っていた。姉が必ず帰ってくるのを。

少女の名はスリジエ・ムーン。南の海スユド・メールにある人魚の国の第二王女。

姉はチェリー・ムーンといい、この南の海にある人魚の国の次期女王となる第一王女である。

部屋で読書するスリジエの頭の中に、太陽の光が海の中に入るかのように姉の顔が映った。

空が朝日で赤く染まる早朝の七時ごろのこと。

「チェリーお姉様……」

嘆くかのごとくつぶやく独り言。数ヶ月も会っていないという寂しさが泡のようにこみ上げる。

スリジエが手に持っている小説は姉からもらった宝物だ。読み終えては何度も読み返す。

そんな行為が日に日に何回も繰り返されるようになった。

チェリーお姉さま、お元気がしら。

ふと、懐かしさが姉との思い出と共によみがえる。

あの頃は楽しかったな。

あの頃は父が暴力振るうこともなかったし、母も生きて姉とも一緒に遊べて幸せだった。

スリジエの目にうつすらと涙が浮かぶ。

あのまま時が止まればよかったのに。そうすれば……。記憶を呼び覚ますかのようにまぶたを閉じた。

そう、あれは私が小さかった頃。人間で言えば大体三歳ぐらいだろうか。

「チエリーおねえさまあつ！」

何も考えず、ただ姉にすがり付いていたあの時代が今は恋しい。

当時は義理の父親である国王ではなく、実の父親と母親、姉と私とで城に暮らしていた。

母親はどこかでつながつているという『もう一つの世界』を研究していた第一人者で、それを発見したのも母親である。

一方で、父親は『世界を支配する』ということに夢中だったが、それほど現在ののように荒れてはいなかった。ただ純粹に『興味がある』として映っていたからだ。

姉は人間で言えば八歳。いずれ南の国をすべる王女として民から期待され愛されていた存在だった。

何をしても姉はすべて完璧でなんでも出来た。姉に出来ないことは無かったほど。

でも、姉は自分は完璧などと思っではいなかった。

「スリジエ。いい？」

なんでも完璧に上手にやろうとするのじゃなくて、やろうとする本人の気持ちが一番大事なのよ。

だからあなたも大きくなったら、

自分の気持ちに正直になれる人魚……いえ王女になるのよ」「  
姉に教わった唯一の言葉。

自分に正直になれ。

自分自身に嘘をついても自分が苦しいだけだと。

どんなときでも、どんな状況でも、

自分に嘘をつくような真似はするな。

そう、教えこまれた。

「チエリーおねえさまあ」

でも、当時の私にはその言葉は難しく……、  
「どうして、うそをついちゃだめなの？」

姉に直接聞いてみたのである。

けれど姉は答えてはくれなかった。すべてわかってるかのよう  
顔には意味ありげな顔で、

「そのうちわかる」

と言ってるかのようだった。

「スリジエ」

「なあに？ チエリーおねえさま？」

姉はそんな私を見つめると母親のような顔つきで微笑む。

「一緒に遊ぼうか」

その言葉が一緒に遊ぶ合図だった。唯一、姉と一緒に遊べる時間。

広いお城でやったかくれんぼ。

母親に怒られても続けた追いかけて。

こっそり隠れてやったつまみ食い。

どれも思い出のある大切な記憶たち。

けれど。

いつからだろうか。それが崩壊し、家族がばらばらになってい  
たのは。

それだけはわからなかった。今でも理解はしていない。理解した  
くない。

「あの頃が一番幸せだったなあ……」

現実に引き戻れるかのごとく目を開く。

スリジエが姉との思い出に浸っているときだった。

「ス、スリジエ王女さまぁ！！ た、たたたた、大変ですう〜！」  
ボタンと荒々しく開かれる部屋の扉。

やってきたのはスリジエに使える専属の使用人の男。

スリジエは使用人がノックもせずに入ってきた事を不快に感じ取る。

「ミラン。一体何事？ 部屋に入るときは必ずノックをしてからっていつも言ってるはずでしょ！」

声を張り上げて怒鳴りつけた。

「いつもそう！ 私が体が弱いからっていい気になって！ お気楽でいいわね！ ミランは！」

読んでいた小説を雑に閉じるスリジエを目にしたミランは、

「そつ、それはスリジエ王女様の思い込みです！ そんなことよりも……」

静かにスリジエに歩み寄って小さくささやいた。

「チェリー王女様が……お亡くなりになられました」

その言葉を聞いたスリジエはとたんに頭の中が真っ白に変わった。

チェリーお姉様が、亡くなった……？

嘘でしょう？

あの、完璧で誰にも負けることはなかった無敵のチェリーお姉さまが……死んだ。

約束したのに。必ず帰ってくるって。一緒に海の世界を回るって。まるで天と地がひっくり返ったようだった。

ショックというより、信じられないという思いが瞬時に現れた。

「チェリー王女様はその日、春野弥生とかいう海棠町に住んでいる少女と戦っていた最中でして」

ミランが状況を説明するも耳には入ってこない。むしろ、受け付けなかった。

「その時、一つの氷の矢がチェリー王女様にめがけて飛んできたようで」

ミランはいつの間にか手に持っている報告書を目を通すようにパラパラとめくる。

「そのまま腹部に直撃して亡くなったと、報告書には書いてあります」

氷の矢がチェリーお姉様に直撃。

信じたくはないけど、ほんとに死んだのね。チェリーお姉様は。

スリジエの目に大粒の雫がしたたるかのごとくあふれ出る。

「そういえば……チェリー王女様が亡くなった時、

一緒に戦っていた春野弥生が駆けつけてきたとか書いてありますね。」

どうせ、でたらめでしょうけど……ってスリジエ王女様!？」

大粒の涙を流すスリジエに驚きの声を出す。

「ど、どとどど、どうされました!? なにか気に障るようなことでもありましたか!？」

「いえ……チェリーお姉様がほんとに亡くなったのだと思ったら急に涙が……」

スリジエは手で涙をぬぐう。

「別にあなたのために泣いてるわけじゃないからね!」

ミランに指を突き付けるスリジエに、自然と口元を緩めたミラン。「わかってますよ。スリジエ王女様が誰よりもチェリー王女様の事を思っているかを」

「ミラン……」

「スリジエ王女様は自分に素直になっただけでいいと思いま

す

ミランと同じように口元を緩みかけたスリジエだったが、すぐさま怒りの顔に変わった。

「っていうか、どうして私が身分の低い男に慰められなきゃいけないワケ!？」

スリジエの中にあるプライドが高い性格と短気な性格が現れた。

「しかもミランに！ おかしいでしょう！ もっといい男に慰めてもらいたいのに！」

「それでこそ、スリジエ王女様です！ そんなところはチェリー王女様にそっくり！」

「……それ、ほめているの？」

複雑そうに眉間にしわをよせてミランをまじまじと見つめる。

「私のこと、なめてるでしょ？」

ミランは慌てて横に首を振った。

「い、いえいえっ！ そんなことありませんよ！ あるわけないじゃないですか！」

「そうよね。ミランは私よりも基本的にチェリーお姉様派だから、私なんか興味ないのね」

「誤解ですよ」

「別にいいわ。ミランのような男、興味がないもの」

スリジエがおかしそうに微笑んだ。

「そういえば、さっき春野弥生がどうのこうのって言ってなかったかしら？」

「はい。そうなんですよ。なぜか、一緒に戦っていた春野弥生が駆けつけてきたらしく……」

「春野弥生が？ というか、その春野弥生とかいう女、一体何者なわけ？」

「さあ？ 詳しいことはさっぱり……」

そこまでは聞いていないといわんばかりの顔で首をかしげるミラン。

春野弥生……。

一体何者なのだろうか。何故チェリーお姉様に駆け寄りたりなどとしたのか。

自分と戦った相手なんかに。おかしな女。

そんな女なんか私に負けるはずがないけど。

正直、そんな女なんか自分が負けるなどという事実を信じたくないという

スリジエのプライドが許したくないだけなのだが。

もしかして、

チェリーお姉様の仇というのはその春野弥生？

スリジエの頭の中にそんな考えがめぐり始める。

「スリジエ……王女様？」

ミランが突然スリジエが黙り込んだため、心配になって声をかけた。

しかし、考えるのに夢中になっているため無反応。

やっぱり、考えてもみても敵に駆け寄るなんて行為、どうみてもおかしい。

ミランが氷の矢が飛んできたって言うていたし、駆け寄るってことは何かをするために近づいたって事ね！

って事はやっぱりチェリーお姉様を殺したのは、春野弥生なのね！  
そう思ったとたんにつつと怒りがこみ上げ始めた。

自分勝手な行為でチェリーお姉様を殺すなんて！ チェリーお姉様をなんだと思ってるの！？

許さない！ 絶対春野弥生を許さない！ 絶対この手で倒してやるわ！！

「ス、スリジエ王女様！ まず落ち着いてください！」

今度は怒りの顔に豹変したスリジエを眺めて不安になったんだろ  
う。

「お身体に影響が出ます！ それ以上興奮すれば倒れてしまいます！」

ミランが必死にスリジエをなだめようと話しかける。  
案の定、スリジエがごほごほと苦しそうに咳き込む。

そこにタイミングよく三人の執事が扉をノックしてから入ってくる。三人とも長身だ。

その一人の黒髪の執事が淡々としゃべる。

「スリジエ王女様。朝食の用意が出来ましたので、お呼びにまいりました」

「お前らはいいよなあ……」

何も知らない執事達を横目でちら見するのはミランである。その表情はどこか苛立っているようにもつかえる。

だが、当のスリジエにはそんなことは興味がわからない。

「決めたわっ！！ 私、チェリーお姉様の仇をとるわ！」

スリジエの突然の唐突な発言に一同口を開けたまま理解が出来ないというような顔を始める。

一番最初に口を開いたのは黒髪の執事だ。

「どうなさいましたか？ スリジエ王女様」

「どうもこうもないわ！ 大切なチェリーお姉様を殺した今から春野弥生を倒しに行こうと思っているの」

その発言を耳にした直後、一同目を見開いて後ずさりをした。

「い、今……から、ですか？」

「そうよ？」

スリジエはあっさり認める。

黒髪の執事が悲しげな目で話す。

「……さすがに無茶すぎます。今やっと、体力が回復したばかりと  
いうのに」

「今行動する以外に何があるの？ 自分が思ったことは素直に従うのが常識よ」

見下したような発言だが、嘘偽りはない。スリジエの本心だ。

「大切な姉を殺された上、何もしないでただただ過ごすという事実  
に飽き飽きなの。」

早くそんな状況から抜け出して、姉の仇をとりたいの!!」  
ミランがおどおどしながら口を挟む。

「で、ですが、そのお身体では長くは持ちません。しかも、体が体  
だとなおさら……」

「それでも行くわ! 止めたって無駄だから!」  
声を張り上げると、立ち上がる。

「どうしても止めるっていうなら、この城から出て行くから!」

スリジエはそのままクローゼットに向かい身支度を始めた。どう  
やら本気で出て行くらしい。

身支度を終えると、荷物を持ってそのまま勢いよく飛び出してし  
まう。

「ス、スリジエ王女様っ……」

ミランはその後ろ姿を見つめることしか出来なかった。

\*

南の海にあるとある洞窟でのこと。

「さて………これから先、どうするかね?」

一人の老人が複数の仲間を見渡す。

集まっていたのはこの南の海を住居とする黒の人魚族たち。それ  
も幹部と呼ばれる身分の高いもの達の秘密の集まり。

集まったわけ。それは春野弥生の持つ『夢石』に関する会議を開  
くためだ。

自分らが生み出した夢石を奪うための道具であるシャルロットは  
見事に弥生に倒されてしまったのだ。

しかも肝心の夢石は粉々砕け、壊れる始末。当初予定していた計

画より大幅ずれてしまう狂い様。

「どうするも何も、どうしようもありませんよ。

夢石を作るのに人魚一匹必要なんですよ？　そう簡単にはいきません」

その老人の問いかけにあきらめた顔で首を振る中年くらいの男。

黒の人魚族は自分達の正体がばれるのを恐れ、フード付きの全身黒ずくめの格好が当たり前。

薄暗い洞窟にいれば、正体がばれることはまずないだろう。

「かと言って何もしないまま、計画が無駄になるようなことはしたくない。

わざわざせつかく、粉々になった以前の夢石を集めてきたのに「険しい顔をするのはやせ細った男。どうやらめがねをかけているよう。」

「大丈夫だ。心配ない。いけにえの人魚はすでに用意はしてある」  
すべてわかってしているかのような目を見せる老人。表情はどこか自信ありげだ。

「それに、私らには無敵の魔法がある。問題は無用じゃ。それを使って、夢石を復元させるのだ」

老人の口元にかすかに笑みが浮かんだ。

## スリジエと弥生、対照的な二人

「やっと、着いたわね……」

スリジエは深く呼吸を整えると岸に上り終え、朝の太陽が目に入る。白波が立ち海につけた脚が海水に掛かり、真上にはくぼんだようにそびえる岩肌。ここにいれば隠れ家になりそうな場所である。

ここはおそらく海堂町の海岸辺りだろうか。右に視線を傾け、遠くに見えるのが浜辺だろう。

スリジエの目の前にはバンドウイルカが悲しそうな鳴き声を鳴いてスリジエを見つめる。

「ありがとう。重かったでしょう？　こんな私をここまで運んでくれて」

イルカに向かって微笑むスリジエにそのイルカはスリジエの頭の中に語りかけた。

『スリジエ王女様。ほんとにこれでよろしいのですか？』

どこかさびしそうな声。やはり心配しているのだろう。もはやギリギリのこの身体がいつまで保てるかを。それに答えるかのような潮風。まるで危険だと知らせるかのようなうだつた。

『やはり危険すぎます。そんなお身体で仇を見つけるなど……』

それはわかっている。自分でも危険なことだつてことは。

スリジエは小さく唇を噛み、憎しみの感情を押し殺す。

でも、一度決めたことを覆すなんてことは出来ない。チエリーお姉様の意思を貫くまでは。絶対に。

「ええ。これでいいの。チエリーお姉様の仇を討つまではあの城には戻らない」

姉のために思うスリジエの感情があらわになったときの表情を見せた。

さらにスリジエは「それに……」と付け加え、

「自分にうそつくなんて事、私のプライドが許せないの。心配して

くれてうれしいけど、もう後戻りはできないの」  
きっぱりと断言する。

その言葉に、

『そう……ですか』

イルカはさびしい吐息を漏らした。

「ほんとにありがとう。あなたがここまで連れてってくれたから、私が泳ぐ手間が省けたの。体力を減らせずにすんだの。感謝してるわ」

『スリジエ王女様……』

「さあ、早くお行きなさい。またあいつらに見つかって捕まると厄介だわ」

イルカは『でも……』とつぶやきためらっている。

「行きなさい！ 早く！」

スリジエのせかしにびくつと反射的に反応すると、イルカはわびしそうにスリジエを見やる。再びためらうがスリジエの言葉に逆らう事も出来ず海の中にもぐり去っていく。

「ありがとう……」

独り言のようにつぶやくと身体を光らせ、人魚の体から人間の体へと変化させる。格好はアンダーにリボンで止めたワンピースにデニムのレギンス。そして歩きやすいように靴はスニーカーにしてある。大きなつばのある白い帽子をかぶり日焼けを阻止する。スリジエの体は長時間紫外線や太陽に当たると体そのものがひからびてしまふのだ。そのため日焼け傘も欠かせない。

優雅に立ち上がると浜辺を目指して歩き始める。

まずは情報を集めなければ。情報なくて行動は出来ない。まずはある程度情報を集めてから仇を討たないと。

そう思っ歩いてみると思ったほど人がいない。やっぱりこんな朝早く人はいないか……。

まあ、地道に行きましょう。太陽が昇っている海を眺めながら前に進む。

その時、人の声が耳に入る。二人組だ。どうやら男女の二人組だ。そう考えるとカップルか。

カップルを見ていると腹が立って来る。自分には彼氏などいないのに、他の女にはどうして彼氏が出るのだ。それが納得がいかない！

どうせ、人前でいちやつくにだろう。そんなやつらに話を聞いてもろくなことしか返ってこない。それならいつそ、無視して通りすぎた方がマシだ。

そう決めると、やってきたカップルの横を通り過ぎようとした。

「ねえねえ。この前、ここで見たってほんととおく？」

「ほんとだつて。ほんとに見たんだよ。人魚を！」

カップルの男性は得意げに話す。

人魚を見たですって？

スリジエは『人魚』というワードが出てきたのを耳にして進めていた脚を止める。

カップルの男性はスリジエに気づかず話を続けた。

「数日前にこの海に来たときのことなんだけどよお、ちょうど海を眺めていたら見えたんだよ！」

「見えたつて？」

「陸に上がる人魚を！」

「え？ ホントにいく？」

カップルの女性は疑いの目で男性を覗き込む。

「ほんとだつて！ その人魚が人間に変わる姿も見たんだつて！」

「嘘だよ。絶対。この時代にいるわけないよ！」

「嘘じゃねえーって！ 嘘だと思うならその目で確かめればいいじゃない」

カップルの話を盗み聞き、考え始める。

確か、春野弥生はあの北の海の人魚国の王女の生まれ変わりと聞いた。そして最近、力が目覚めて本来の人魚の姿になれることもミランから手紙に事細かに書かれてあった。もしその人魚が春野弥生

つてことはないだろうか？ 人魚だなんてめつたにいたるものではないし、もつとも滅んだ北の海の人魚国の人魚だとおさらだ。それがもし春野弥生であれば話を聞いておいた方がこしたことはない。もしそれが春野弥生でなくても北の海の人魚国の人魚の情報として集められるだろうし、どの道あのカップルに話は聞くだけ聞いておこう。

カップルに話を聞くのは納得がいかないスリジエだが一度決めたことはくつがえさないため実行に移す。

「ねえ……そのあなたたち。ちよつと、いいかしら？」

振り返ったカップルはスリジエをじろりと警戒するように見つめ、  
「なんだよ。てめえ。なんか用かよ」

とつぶやく。

「そう。あなたたちに用があるの」

スリジエの言葉にカップルの女性が反応を示す。

「用？ 何かあったっけ？ ねえ、敬君」

女性に語りかけるように敬君と呼ばれた男性は首をかしげた。

スリジエはその二人を無視して話を進める。

「さっきの人魚の話なんだけど」

男性がとぼけたように声に出す。

「さっきの話って？」

「そう。さっきの話よ」

スリジエはカップルに、にこりと笑顔を向ける。

「興味深くてつい盗み聞きしちゃったんだけど、詳しく教えてくれないかしら？」

三人を包むかのように風が通り抜けていった。

「ごめんね。葉月、睦月さん。わざわざよびだしたりなんかしちゃうって」

そう言うのは春野弥生。歩くたびに栗色のツインテールが揺れる。海堂町にあるいちばん大きな図書館で個室がある一角を指して歩いていた。外は太陽が図書館を照らし、館内を暖める。

時刻は十時ごろ。夏休みが終わる最後の日である。夏休み最後の日とあって宿題を終わらせようとする小学生や中学生などで埋め尽くされていた。もちろん弥生も宿題を終わらせるために来ている。

実はあのシャルロットとの戦いが終わり、海堂町に戻ると日にちが随分経ってしまった。どうやら海の時間と海堂町の時間の流れが違っらしい。そのため、気づいたときには既に夏休み残り後二日になっていた。ほとんど宿題をやっていたいなかった弥生は徹夜続きで宿題をやったが、全く間に合わずじまい。結局、葉月と睦月の力を頼るしかほかがなかったのである。

「他に頼る人がいなくて……。自分でやったんだけど、宿題が多すぎて中々……」

はあ……とため息を漏らす。

「ほんとは自分でやったほうがいいのに、他人任せになっちゃって」「ほんとよ全く……。本当なら家でのんびり過ごすはずだったのに」

そう愚痴をこぼすのは秋村葉月。弥生の親友であり、唯一弥生の幼少期時代を知る数少ない言わば幼馴染である。

「毎年、毎年、懲りないわねー。いつもぎりぎりまで遊んで、夏休みが終わる間に宿題やり始めるのが弥生のいつものパターンなのよねー」

「俺は図書館に行きたいと思ってたからちょうどいいと思っただけだ。別に気にしてなんかいない」

冷たい口調で話すのは冬川睦月。夏休みに海堂町にやってきたリア時代の恩人である。

三人は個室がある場所にやっては来るが、どこも満室で空いている場所がない。

それに葉月がだらけた声で言う。

「やっぱり、夏休みの最後の日とあっていっぱい入ってるわねー。あんまり空いている個室無さそうよ」

「やっぱり無理かぁ……。それもしょうがないか……」

弥生はしょんぼりと肩を落とす。

だが睦月が口を開けた。

「……いや、そうでもないらしい」

それに弥生と葉月が「へっ?」と声を上げる。

二人はまじまじと睦月の視線が向く方へ目を凝らすと、一部屋ひとくちや空いている個室がある。

「個室が空いてる!」

うれしそうに目を輝かせる弥生。

「へえー。以外ね」

弥生とは対照的に冷静につぶやくのは葉月だ。どうやら個室が見つかって落ち込んでいる様子。

「入るか」

睦月がつぶやくのが耳に入ると、

「うん」

弥生と葉月はうなずいて個室に入っていく。

個室は約八畳ほどの広さ。白い長方形のテーブルが縦に置かれている。椅子もテーブルにあわせた白い椅子。それ以外は何も無い空間。あけたドアの数メートル前には外に抜け出せそうな窓。勉強するには最適の環境である。

「いい個室だね。空いてて良かった。ね、葉月」

「弥生、あなたが宿題するための個室なのにどうして私に質問してくるわけ?」

葉月の言葉に、はっと口をつぐむ弥生だが、

「でも宿題はなんとか一人でやってみるから、葉月は本でも読んでたら?」

と葉月に心配をかけないように逆に質問返す。

「私は本なんて興味ないっつーの！ 新聞の大安売りのスーパーの広告とかなら興味あるけど、あとは興味ないわよ！」

「葉月つて、そんなのに興味持つなんて……主婦？」

ほかんと口を開けて葉月を見つめる弥生に、すでに座っている睦月が声かけた。

「おい、春野。こんなことしてる場合じゃないだろ。そんなことしてる間にも時間はどんどん過ぎていくぞ」

「そうだった。宿題やらなきゃいけないんだった」

弥生が思い出したかのように手をたたくと睦月の向かい側の席に座る。葉月は睦月から二つ空けた、右側の席に座った。

ついいつものくせでおしゃべりしちゃったけど、今回は夏休みの宿題をやるために来たのすっかり忘れてた。危ない、危ない。

まだやっていない宿題持ってきたかばんの中からテーブルの上に出し筆記用具も一緒に取り出す。

教科は数学や理科など理数系の宿題が多い。

宿題を見た葉月が意外そうな顔を見せる。

「宿題、たったこれだけ？」

「……え、あ、うん。後の宿題は徹夜して終わらせたから。わからなかったのはこれだけ」

「これなら、早く終わりそうだな」

睦月がどこかうれしそうな声でつぶやいた。

弥生は睦月と葉月に教えてもらいながら宿題をやり始める。

「まずは……関数からだな」

そう睦月は言うつと宿題の冊子をばらばらめくった。

弥生が通う中学は三年は高校受験もあつてか、数学などはある程度進めて教えている。だが、弥生は比較的頭が弱い方なためかあまりについていけないのだ。

「か、関数……一番苦手だよ」

「大丈夫よ。覚えれば難しくはないんだから」

「葉月は頭がいいからいいだろうけど、私数学とか苦手だし」

「まあ、とにかくはじめろぞ」

睦月はそんな弥生を気に留めることなく宿題をやり進めようとする。

いいなあ……睦月さんは。頭がよくて。

そう思ったとき、急に頭がガクンと揺れ力が抜けた。昨日から徹夜で宿題をやったから眠気が来たのだろう。今になって眠気がくるなんて。タイミングが悪すぎる。

首を振って眠気を飛ばし、さらに両手で頬をたたいて眠気をなくす。そして呼吸を整え、落ち着いて宿題が出来るように息を吸ったり吐いたりする。

不審に思った睦月が眉間にしわをよせて、

「春野、お前何やってるんだ……?」

弥生を怪訝そうに見つめる。

「な、なんでもないよっ！ 早く宿題やろっ!」

ごまかし笑いを浮かべながらシャープペンシルを手に取った。

いつも眠くなったときやっているのが睦月さんに変な目で見られてしまった。一生の恥だ。それならもっとトイレとかに行ったらいいけど、でもやっておいた方が良かった。

再び宿題と向き合う弥生だったが、またもや力が抜ける。

だ、だめ………ねちゃ、だめ………。

一瞬、弥生の視界が闇に包まれた。そのわずか数秒後。誰かが弥生を呼ぶ声が聞こえてくる。

「……野。………春野！ しっかりしろ!」

睦月が弥生を呼ぶ。その声にはっと目を覚ますと弥生を覗き込む睦月の顔が映った。

「ひゃあああああ!？ む、睦月さん!？ っていうか私何してたの!？」

弥生は回りを見渡し確認する。

「それはコッチのセリフよ！ まったく、今度は宿題中に寝るなんて何考えてるのよ!」

そんな弥生に腹を立てて憤慨させる葉月。

葉月と違って睦月はいたって冷静に問いかける。

「春野大丈夫か？　もしかしてお前、寝てないのか……？」

睦月の問いにドキッとすることも、嘘はつけずに「うん」と答えてしまふ。

「つたく。どおりで……」

あきれた声で息を漏らす。でもその表情はどこか怒っているようにも感じる。

「とにかくお前は先に宿題終わらせたら寝ろ。宿題やらないで寝てるだけじゃ、時間の無駄だからな」

睦月はそういい残すと椅子に座り、弥生の宿題を手を取った。

……馬鹿だなあ。私って。

ついうたたねしてしまったことを後悔する。

葉月を怒らせるわ、睦月さんもあきれたように見えるけど内心怒っているし……。なんて事をしたのだろう。

弥生は深くため息をつく。と次の宿題を手に取り開こうとする。

その時、葉月と睦月と目が合ってしまうが二人とも視線を逸らし宿題を続けた。

ガンとシヨックで固まってしまう。

どうしよう……。

苦手な理科の宿題の冊子を取りながら問題を解き始める弥生だった。

\*

「なるほど……そういうことね」

今だ浜辺でカップルから話を聞いていたスリジエは真剣に耳を傾けていた。ようするに海にジョギングしに来たときにその人魚をみ

たということらしい。

「つまり、その人魚は何かを抱えているようにも見えた……と」

「そうそう！ 早い話、そういうことなんだよ！」

カップルの男性は胸をそらして自信満々の顔を見せる。だがその反対に女性は疑いの眼でちら見。

「ほんとの話し？ それえ〜？」

「ほんとだって！」

しかし、スリジエはカップルの話を聞いていくうちに違和感を抱き始める。

……なにかがおかしい。

確かに、人魚の話は嘘には思えない。けれども、完璧に出来すぎている。誰かが仕組んでるかのよう。だから妙な違和感が生まれしてしまう。私の気のせいかしら？ それとも……。

いや、あいつらが仕組んでやっているというのもありえる。あいつらは目的のために宝玉を手に入れようとどんな手でも使う奴らだ。もちろん、その宝玉の本来の持ち主である春野弥生にも手を出して、宝玉とその権利を奪おうとする。油断は出来ない。だとすると、このカップルはわざと近づいたとも考えられるが……。

その時、カップルの男性が突然声をかけてきた。

「あの〜……、ちょっといいですか？」

考え事をしていたところに声かけられたもので、スリジエは「へっ」と声をあげてしまう。

「な、何かしら？ 話はまだあつたかしら??」

「まあ、話というか、この町に伝わる人魚伝説の話も興味あるのかなあ〜と思って」

男性は頬をぽりぽりとかくと、

「実はこの町の海って昔、北の海の人魚国があつた場所なんですよ」  
さらっと口にする。

「なんですって！ それって本当なの!？」

その言葉に犬のように食いついた。

「じゃあ、ここに人魚の国があったというのは噂じゃなかったのね！？」

スリジエの気迫に後ずさりしながら男性が答える。

「は、はい……噂ではその人魚国の王女がまだいきているんじゃないかって広まっているし」

北の海の人魚国の王女！

その言葉と聞いたとたんには沸いていた疑問は飛び、確信にかわる。間違いはない！ その王女こそ、探している春野弥生！ やっぱり春野弥生はこの町にいるのね！！

そうと決まれば、まずはこの町に伝わるといふ人魚の伝説を詳しく調べた方がいいわね。このカップルから聞いたのがデタラメだったら収集がつかないもの。自分に正直になる！ そう、やっぱり自分がこうと思ったものは行動に移さなくちゃね。

「その、人魚の伝説が詳しく存在している場所って、どこかないかしら？」

「それってやっぱ……」

「海堂図書館だよね〜」

「海堂図書館……それはどこにあるのかしら？ 地図書いてくれない？」

スリジエは持っていた紙の切れ端と万年筆を取り出すと、カップルの男性に手渡す。男性はさらっと書き上げ、スリジエに再び渡した。

「ありがとう。一応、助かったわ。これなら……」

スリジエの口元に笑みが浮かび上がったのだった。

## 春野弥生の誤算？

……全く、春野の奴は。

冬川睦月は図書館の個室で、弥生の宿題を見ながらため息をつく。午前十時十五分ごろのこと。

ため息の原因は春野弥生だ。自分の前で平気でうたたねしていたので、妙に腹が立つ。もちろん、本人は無意識でやってしまったのだろう。徹夜してここまで終わらせたという意思はほめてあげたい。だが、やるにしてももっと計画的にすることは出来ないのか？

弥生の宿題をパラパラと一通り目を通していく。

きちんとやってるんだな。自分で頭が悪いといっている割には自分がわかる範囲でほとんど埋めている。わからなくても一応答えは書いているので上出来といっちゃあ上出来だ。

だが、結局やるにしても計画的にやらなきゃ意味がない。もっと考えて行動してくれれば……。

ふと顔をあげた時に弥生と目が合った。どうせ問題がわからないとかだろ。自分ややるといっていたのだから弥生本人にやらせないで。

そう考えた睦月は目線を逸らす。目線をそらされショックで固まる弥生が目に入った。

全く、これしきのことショックを受けるとは情けなさ過ぎる。

鍋が煮えくり返ったかのような怒りに襲われた。

その時、それと同時にシャルロットのことが思い出される。

黒の人魚族に夢石を奪うただけに生まれたシャルロット。ただ夢石を奪うために利用され、城と共に消えていった男。そういえば、以前チエリーとかいう南の海の人魚国の王女の執事をしていたかいつていたな。

……全く、性格の悪い男だ。

再びため息をつく。

そういえば、春野は俺がシャルロットに操られたとき、助けに来てくれたんだっただな。

海の時間の流れは海堂町の時間の流れとは違い、遅く流れる。記憶を封印されていた弥生はそれに気づかず、それでもなお自分を助けに来てくれた。海堂町は時間の流れが速いため、海から上がったとき、数日や数週間も過ぎていたということがよく起こる。

だとすれば、俺を助けに行って俺と戻ったときもう時間がなくなっていたのかもしれないな。それで夏休みの宿題をやる暇がなくなってしまった。シャルロットは相手がいかなる状況でも目的のためならどこへでもやってくる。弥生から聞いた話だと、シャルロットは弥生にちよくちよく夢石を奪いにやってきていたようだから俺を操ったときも、弥生になにかしら招待状を送るなりして手段を選んでいたのかもしれない。

突如、睦月の手が止まった。

……なら、春野が夏休みの宿題をやる暇がなくなったのは俺のせいだな。

目を曇らせ、口元がきゅっと結ばれる。

もし、俺がシャルロットに操られなかったら、海に入ることなく夏休みをすごせ、宿題もやり終えていたはず。昔の記憶も呼び覚ます事もなかった。

……言い過ぎだな。

シャルロットとの戦いで時間を費やしてしまったても、その遅れを取り戻そうと必死になって徹夜までして宿題をやっていた春野に厳しく当たりすぎた。いまさらになって気づくとは。

睦月の心に罪悪感が芽生え始めた。

弥生はちつとも悪くない。元はといえば、弥生であるリアを助けるためにシャルロットと手を組んでしまい、足を洗ったあともそのシャルロットに意識を操られ、結果弥生に助けに来てもらうハメになってしまった。自分がまいた種なのに。助けてくれた弥生を責めるなんて。本人は一生懸命やっているのに。

こんなことになるんだつたら、早く終わらせてあげるためにアド  
バイスかなんかやるだけでよかったな。

今からでも遅くは無いと弥生に謝ろうとするが、

「……………あつ……………」

声をあげるも言葉にならない。

いまさら謝って大丈夫なのか？ あいつ、けっこう怒って…………いやシヨックを受けたりしてるんじゃないやあ…………。

睦月の脳裏に迷いが出てしまい、ためらいがちになる。

その時顔をあげた時、ぱっちり弥生と目が合ってしまった。

二人は「あつ」と声を出してしまう。

弥生はしばらく睦月を眺めていたが、きまわずそくに目を逸らす。

それに対し睦月は平常心を装いながらも、後ろめたさを感じてしまつ。

これからどうすればいいんだ？

個室に気まずい雰囲気の流れた。

\*

終わらない……………どうしよう。

弥生ははまだ夏休みの宿題と対面していた。

すでに十時四十五分になろうとしている。

向かいの席に座る睦月と葉月の顔色をうかがいながら矢ついていたため全く進んでいないからである。原因は弥生本人が二人の前でうたたねをしてしまったからである。本人は寝不足だったためで反射的な行動だが、それが厳しい二人の心を怒らせてしまったようなのだ。

そのためいつまた怒られないか、はらはらしながら手先を動かす。手先がびたりと止まり、その代わりにため息が出る。

それはコツチのセリフよ！ まったく、今度は宿題中に寝るなんて何考えてるのよ！

とにかくお前は先に宿題終わらせたなら寝ろ。宿題やらないで寝てるだけじゃ、時間の無駄だからな。

睦月と葉月の言葉が深く胸に突き刺さっていた。

悪気がなかったとはいえ、結果的に二人を怒らせてしまったのは確か。やってはいけないことをやってしまったというのはこの事なのだろうか。宿題をやり終えた後はどうやって二人と仲直りしようかなあ……。

傷ついた感情が抑えきれない時、睦月に声をかけられる。

「……なあ、春野。ちよつといいか？」

「えっ」

弥生は拍子抜けしたような声を出す。

まさか睦月に声をかけられるとは思いもしなかったため、一瞬間の中が真っ白になる。

「どっ……、どう、したの??」

「あっ、いや、ちよつときになる所があつてな……」

「気になる所……?」

キョトンと尋ねる弥生に、

「実はここの答えなんだが……」

と睦月が手に持った冊子を弥生に見せ、詳しく説明していく。

「……だから、もうちよつと解き方を変えていったほうがいい」

「なるほど」。徹夜明けだったからそこまで頭が回らなかったよ」

弥生はごまかし笑いを浮かべた。

その弥生を見た睦月が気まずそうな顔を見せる。

「……あれ？ 私、なにか気に障るようなことしたの？」

睦月の表情に内心しどろもどろになり始めた。

だが突然、睦月が弥生に顔を近づける。

「春野」

「えっ、ええええええええ？」

弥生は反射的に肩をすばませた。それと同時に顔が火照る。

何、何！？ な、なにがおきるの！？ ま、まさか……キ、キス！？

突然の出来事のため、冷静に判断できていない。

睦月は弥生に向かって小声でささやく。

「春野、悪かったな」

「……………へっ？」

ぼかんと口を開けて固まっていたが、

「何か私、睦月さんにやった……かな？」

ようやくそれだけしゃべれる余裕が出来る。

その質問に睦月が少し視線を逸らしながらつぶやく。

「俺、お前の事情に気づかずお前を傷つけたこと、後悔していた。

ほんとに悪かった」

「あ、そのことね……」

「結果的に春野を巻き込んで時間を削らせて、俺に責任があるんだ。全部」

「そ、そんなっ！ 睦月さんは悪くない！ む、睦月さんは最初の

出会いも、海堂町で再びあったときも私を助けてくれた。私はそれ

だけで充分。だから、自分を責めないで」

「春野……ありがとう」

睦月はほっとしたような笑みを浮かべた。

睦月の笑みに弥生もつられて微笑む。

……睦月さんと仲直りできてよかった。

もう睦月の心に迷いはなかった。

\*

「お、終わったあ〜〜！！」

弥生は気持よさそうに伸びをする。

睦月と仲直りをしてからわずか十五分後、あっさりと夏休みの宿題が終了。いままで悩んで手が止まっていたのが嘘のようだ。もちろん、すべて睦月と葉月のおかげである。この二人なくして、宿題はなかなか終わらなかったからだ。

向かいの睦月と葉月にお礼を述べる。

「ありがとう。二人とも、ほんとに助かったよ」

椅子に座ったまま、頭を下げた。

それに睦月と葉月は

「……まあ、よかつたな」

「やるだけやったから、疲れたわよ。ほんとに」

ぐったりとした表情でため息を漏らす。

さすがにほとんどの宿題を見てもらうだなんて、残酷なことをしたな。

「終わったが言わせてもらうが、もうちょっと計画的にやった方が効率がいい。夏休みが始まる前、計画を立てなかったのか？」

「あ、いや、立てたのは立てただけど、やろうとするとなぜかいろいろ邪魔が入ったりして中々進まなくて……そしたら結果的にこうなって……」

弥生の言葉に葉月が疑問をぶつける。

「いろいろ邪魔が入ってたって、なにに邪魔されたっていつのよ？」

「えっ。い、いやあ……それはその……」

弥生は葉月の疑問に答えられず口ごもる。

まさか、魔物やシャルロットという男に邪魔されたなんて信じてくれるだろうか？ 難しいだろう。

「ほ、ほんとにいろいろ！ いろいろあったの！」

「いろいろねえ。とにかく、夏休みの宿題は早めに終わらせろっていつも言ってるじゃない。やるの遅すぎ」

もはやあきれることしか出来ない葉月。

「今年はとくに遅かったわね。一体何があったらこうなるのよ……」

その葉月の言葉に一瞬ぎくりとしながら、冷や汗をおでこにたらす弥生。

なにか二人にお礼がしたい……。

そう胸の中で思うが何をすれば検討がついていない。

「ね、ねえ！ なにか二人にお礼がしたいんだけど、何がいいかなっ？」

行き当たりばったりで尋ねてみた。

しかし。

「別にいらん。俺は図書館の本が気になっただけで、お礼なんかどうでもいい」

「弥生なんかにお礼をもらっくらいなら、とっくに家でのんびりしてるわよ」

と二人に断れてしまう。

どうしよう。あきらめようにも、あきらめきれない。

「でも！ 結局は私が頼んだんだし、やっぱりなにかお礼を……したいし……」

何をすればいいか思いついていないため、言葉につまづく。

ふと睦月が独り言のようにつぶやいた。

「なんか、のどが渴いてきたな」

ずっと宿題をやってきて水分が消耗したのか、のどがかわいてきたらしい。

その言葉を聞いて、ある提案を思いつく。

弥生は椅子から立ち上がり、その提案を二人にぶつけてみる。

「ね、ねえねえ！ もしよかったら、私が何か飲み物を買ってこようか？」

弥生の提案に二人が「え？」と声を出す。

「飲み物を……」

「買ってくる……？ 急にどうしたのよ、弥生」

口を開けたまま立ち上がった弥生を見上げる睦月と葉月。

「二人とも、そろそろのど渴いてきたんじゃない？」

「まあ……、人一倍宿題見ていたから、のどは渴いてきたな」

「確かに、なにか飲みたい気分ね……誰かさんのせいで」

「だったら！ 宿題を見てくれたお礼として、私が何か飲み物をおごるっていいのはどお？ それならいいでしょ？」

弥生が突然提案をしてきたので言葉をなくす睦月と葉月。

だが、すぐさま我に返り、

「まあ、飲み物を買ってもらうくらいなら……別にいいか」

「弥生のおごりとなれば、遠慮なくそうさせてもらおうかしら」

二人とも、あっさりその提案を承諾する。

「じゃ、二人とも何が飲みたい？」

睦月はそっけなく答える。

「普通にウーロン茶でいい」

「睦月さんはウーロン茶……と」

弥生はズボンのポケットから取り出した小さなメモ帳に書き記す。

「で、葉月は？ いつものあれにする？」

「そうね……いつものココナッツサイダーにするわ。下手に新しいドリンク飲んで痛い目あうよりマシだしね」

葉月のは覚えているのか、メモ帳には書かない。

「じゃ、さっそく買ってくるね。買ってすぐ飲んだほうが、のど潤うし」

「わかった」

「ま、せいぜい迷子にならないようにね。弥生」

「わ、わかってるよー！」

弥生はふくれっつらな顔を見ると、個室を後にした。

\*

……出ていったわね。

弥生が個室から出て行くのを見届けると、内心ほくそ笑んだ。同じく十一時ごろの個室では、葉月が立ち上がり睦月の隣の席に座る。

もちもん、理由はほかでもなく、睦月を自分のものし、自分を裏切った弥生を傷つける事。弥生が明らかに睦月に思いを寄せていることは鼻から知っている。なら、たとえ恋愛が鈍い弥生でも私が睦月とくつついたら、絶対何かしらの反応はするはず。そこに自分は弥生とは親友じゃないと告げれば、傷つきやすい弥生に大ダメージを受けさせられる。復讐が果たせるというわけだ。

「ねえ、睦月さん……で、いいわよね？」

葉月は自分の身体を睦月の腕に擦り付けるかのように寄っていた。突然葉月の表情が豹変したのに気づいた睦月が眉間のしわをよせる。

「なんだ……？ 急に寄ってきて」

「別にいいじゃない。減るもんじゃないんだし」

葉月は妖艶な笑みを浮かばせるとささやいた。

「……ねえ。弥生なんかやめて、私にしない？」

「は？ 一体何のことだ？」

睦月のわけがわからないといいいたそうな顔をのぞきこむと、

「弥生みたいな、馬鹿で性格の悪い女なんかよりも、私みたいな、知的で誰よりも睦月さんを思っている一途な女の方がよっぽどいいと思うんだけど」

弥生をあきらめるといわんばかりに話を持ちかけた。

さっきの弥生のうたたねで睦月さんは弥生に腹を立てていた。なら、話を持ちかけるなら今しかない！

睦月みたいな男に弥生は全く似合わない。睦月の隣をゲットするのは弥生ではなく、この葉月だ！

だがしかし。

「悪いが、そういうのはあまり興味ない。それと春野はお前の親友だろう？ なぜそんなに憎む。憎む必要あるのか？」

睦月にあっさりとふられた上に、逆に質問返しされてしまう。

しかし葉月は親友という言葉にぴくんと反応を示す。

「親友………私が？ あの弥生と？ 冗談じゃないわ。私を裏切った女なんか私の親友じゃないわ」

冗談じゃない。私の好きな男ばかりを奪っていくあんな女なんかと親友なんて、へどが出る。

「そんなことよりも、私と一緒にになったほうが幸せよ？ 男をとつかえひつかえ付き合うような弥生よりも」

睦月はしばらく黙り込んでいたが、口を開ける。

「悪い。俺は秋村と一緒ににはなれない。それに、春野は男をとつかえひつかえするような奴じゃない。純粋で明るい女の子だ。それは一番、秋村がわかっていることじゃないか」

「そう……駄目なの」

寂しそうにつぶやくが、別にあきらめたわけじゃない。

このまま引き下がるわけにはいかない！

「だったら、一度だけ私とデートしてくれない？」

葉月の決死の頼み綱。口で駄目なら今度は行動で落とさせてみせるといわんばかりの顔。

「一度デートしたら睦月さんのことはあきらめる。だから、少しでもいいからデートしてほしいの」

「そ………れは………」

睦月に迷いが現れた。

葉月はそれを見逃さなかった。

「一回だけ、デートするだけなんだから別に迷う事ないじゃない。私、睦月さんがデートに来てくれるの、楽しみにしてるのよ？」

あたかもデートをするのを肯定させたかのような言い方。そんな葉月に睦月は葉月の目的に気づく。

「なにを思っつけてやっているかは知らないが、春野を傷つけるために誘っているなら俺は受けられない」

睦月の言葉に目を見開く葉月。

睦月は話を続ける。

「もし、これ以上なにか企んでいるなら、たとえ秋村でも許さない」  
それだけ言い残すと立ち上がり個室から出て行ってしまった。  
一人きりになってしまった葉月に静寂が訪れると舌打ちする。  
まさか睦月本人が計画に気づくなんて。さすが『もう一つの世界』  
の王子様ね。

でもこれも全部、あの女のせいよ!!

憤慨したように向かい側に移動すると弥生が座っていた椅子を蹴り出す。椅子は蹴られた拍子に倒れ、椅子が倒れ反発した音が響き渡る。

やっぱりあの女は私からなにもかも奪う気なのね!

あの時も!

あの時も!

あの時も!

弥生、私を本気怒らせた罪、思い知らせてあげるわ……。  
個室に葉月の高笑いの不気味に響いていた。

## 弥生、ある少女に出会う

暑い……暑すぎる。

弥生は図書館の一階の廊下ろうかを歩いている。睦月と葉月に夏休みを手伝った御礼として、飲み物を買ってあげるためにきた。自動販売機は駐車場にもあるが、そこまで遠すぎるため、近くである中庭の自動販売機で買うことにしたのである。

歩く途中で先ほどのことを思い出していた。

春野……ありがとう。

睦月の言葉から初めて聞いた感謝の言葉。

あの言葉が頭から離れない。まさか睦月さんがすべて自分のせいだと思っていたなんて知らなかった。元はといえば、夢石を持って逃げた自分がまいた種なんだから睦月さんは悪くないはずなのに。睦月さん、大丈夫かな。今でも自分だけの責任にしてないかな。でも、睦月さんと仲直りできてよかった。あのまま仲直りできなかったらどうなっていた事か。

というより、声かけたのは睦月さんだし。自分が威張る事じゃないし。

そういえば、葉月、なんだか機嫌が悪かったなあ……。やっぱり私が計画的に夏休みの宿題をやらなかったせいかな？

実は葉月が弥生を憎んでいるなど本人は気づくはずも無い。

もし、いつものがなかったらどうしよう。どうやって葉月に謝ろう。

弥生は足を止め、しばし考える事わずか数秒。

……。

ま、その時はその時でなんとかなるよね。

一階の廊下を抜けると、一度外へと出て路地のような狭い一本道を歩く。生い茂った草が出迎えた中庭へと続く道。

だが、それはそれとして、ここの図書館の中庭はこども複雑な場所に入り組んだ道になっているのだらう。着くまで体の中の水分が半分も抜けそうなくらい蒸し暑い。

その道を抜けると中庭に到着する。

着いたあー！

弥生が心の中で大絶叫。

着いた瞬間、弥生を通り抜けるかのような風が吹く。

その中庭には所狭しと日陰で休む人々。もはや日陰で休む場所はほぼないと言っているほどの人数だ。その中にはベンチで本を読んだり、草が生えている地面で昼寝する姿も見取れる。

個室から中庭まで歩いただけなのに、妙な達成感が湧き出る。しかし、こうして立っているだけで汗がどんどん噴出していく。

やばい。早く飲み物買って個室に戻らなきゃ、先に自分が暑さで倒れてしまう。

数百メートル先にある図書館の壁に引っ付くように立つ自動販売機の姿。買ってくれる人を待っているかのようだ。

すぐ近くでよかった。

自動販売機まで歩くと弥生は驚愕する。

まさかのまさか。今日に限ってウーロン茶とコナツツサイダーが売り切れになっていた。夏休み最後の日で猛暑日とあって、飲み物を求める人が多かつたらしい。

どうしよう……ほんとにどうしよう。

口を半開きにしたまま顔面蒼白になる。自分でもその場から体が動く事が出来ない。

睦月さんには……麦茶でもいいかな。

小銭を入れ麦茶のボタンを押すと、出てきた麦茶のペットボトルを取り出す。

葉月は……どうしようか。

葉月は低価格でしかも味も葉月好みの味のため気に入っているコナツツサイダー。それが売り切れとはさてどうしたものか。安く

てココナッツサイダーの味に似ているもの……………。

もう、それかサイダーにするか。ちょうど、特別特価で百円だし。いいよね。

再び小銭を入れると麦茶の同様に、ボタンを押して出てきたサイダーを取り出した。

ふと後ろを振り向くと弥生の後ろで、まだかまだかと待ちわびる人の行列。

「えっ。あつ。ご、ごめんなさい！ 失礼しました！」

弥生は逃げるかのようにその場から立ち去る。最初着いたときの位置に戻ると、木の陰を探す。

何時間も宿題と向き合っていたからどこかで休みたい。

でも、もう飲み物買ったし……………いまさら一休みすると、飲み物がぬるくなっちゃうし。

自分の勝手な判断で決めちゃっていいのかと悩む。

けど、少しだけ寝て体を休ませたいし、それに明日になったら学校が始まるし……………。

弥生は「学校」という言葉で引っかかる。

そういえば、明日から学校なんだよね。また、クラスのみんなに会えるんだ。

弥生の口元が緩む。

思ったんだけど、睦月さんはどの学校に行くのかな？ もしかして、私と同じ学校……………だったり？ あわよくば、同じクラスになるかも？

もしそうなら今まで一番楽しい学校生活になりそう！

ばああと弥生の目が星のように輝く。

そう思ったとき再び力が抜ける。個室と同じように睡魔が襲い始めたようだ。

ああ。どうしよう。ほんとに眠くなってきたやつだ。

目をこすりつつ、やる気がどんどん飛んでいく。

やっぱ一休みしてから……………。

その時、睦月のある言葉が引き出される。

行動は計画的にするように！

その言葉で睡魔が消え、完全に目が覚める。

そうだ。私は睦月さんと葉月に飲み物を買ってあげるために、ここに来たんだ。私が一休みするために来たわけじゃない！

弥生は立ち上がり、ペットボトルを両手に持ってきた道を戻ろうとする。

しかし、弥生はよろける少女と肩をぶつけてしまう。しかもその少女はそのまま地面に倒れてしまう。

えっ？

振り返るも、何が起こったのか立ち往生するしかなかった。

\*

海堂町にある図書館に向かう歩道。

「ここはどこよ……」

スリジエは思い足取りで図書館に向かっていている最中である。浜辺にいたカップルから地図を元に歩いている。だが、その道は見たこともない箱のようなものが動き、一番嫌いな太陽が直に当たる。自分が一番住みたくない場所だ。しかもここは人間が数多く住まう場所。ビルという建物が数多く建てられている。なんだかやりづらいといったらありゃしない。

なんだかんだ歩いていると、大きな茶色の建物が木の間から見え隠れする。

おそらくあれが、自分が目指している図書館だろう。

だが、見え隠れするということはまだまだ歩くということだろう。どんだけ浜辺から遠いのだよ。その図書館というものは！

自分には時間がないのに。  
全身で息をすると足を止める。

だが……自分には仇を討つまでの時間は残されているのだろうか。  
仇を討つ前に終わってしまうのでないだろうか。

きゅつと下口唇したくちびるを噛み、悔しさを滲ませた。

それでもスリジエはすぐさまを迷いを吹っ切らせる。

いや。それでもやるんだ。チエリーお姉様の死をそのままにして  
おかない。絶対チエリーお姉様の仇は自分が必ず討つ！ たとえ、  
自分に時間がないとしても！

止めていた足を前に進め、図書館へ向かい歩き出す。

しばらく歩くと図書館の外観がだんだんはつきりと見えてくる。

「あれね……」

ぼつりと一言つぶやく。浜辺から歩き続けたため、その表情はぐ  
ったりと疲れきっていた。図書館の前まで来たところで立ち止まる。  
すぐ近くに体を休ませるのにはちょうどいいベンチがある。

「あれで一度体を休ませましょう」

ベンチまで歩くと腰掛けた。

つ、疲れたわ……。

深いため息をつくくと、空を見上げる。

私の体力がほとんど残ってないわ。これからどうしようかしら。

もちろん、目当ての図書館に入るわけだが、もうしばらくやすん  
でいないいけない。体を壊して倒れてしまいかねないからだ。だが、  
時間が残ってないというのも事実。急いで出来るだけの最低限のこ  
とはしておかないとやばい。

やはり休むのはここまでにしておこう。

スリジエはすつと立ち上がり、まだ回復していない足を動かさな  
がら歩き出す。

入り口付近まで着くと、壁のトンネルのようなものがどこか続く  
道を見つける。

なにかありそうね。

興味がわいたのか、その中をくぐるかのように歩き中庭に出る。こ、こは……？

見たこともない光景が目に入り、しばらく脳内が混乱におちいつてしまう。

ど、どこなの……？

立ち往生の中、中庭を歩き回ろうかと考える。

だ、だめよ……本来の目的は人魚伝説について調べる事よ……中庭を歩き回ることではないわ。

スリジエは来た道を引き返す。だが、すぐさま足を止め迷いが生じる。

でも……やっぱり……。

仇を討つのも大事だが、それより以前に自分が倒れたら元も子もない。

再び体の向きを変えたとき、脚の力が抜けその場にこけそうになる。だいぶ体力が消耗しているようだ。

しかも、目の前から少女がやってくる。このままだとぶつかるとは確かだろう。それだけはさげなければ。

そう思うが、体がいう事を聞くはずもなく案の定、少女と肩がぶつかってしまう。

かと思うと、体が傾くような感覚に陥る。

スリジエはそのまま意識を失った。

\*

……ど、どうしよう。実に困った。

いまだ中庭にいる弥生は目の前に倒れている少女によりそっていた。

数分前、個室に戻ろうとしたときのこと。

少女とぶつかってしまいあやまろうとしたとき、その少女がそのまま倒れてしまった。その場から立ち去ろうかとも思ったが、それはあまりにも無責任すぎるかと思ひ、何とかして木の下まで移動させたのだ。だが、そのあとがどうすればいいのか迷っている最中なのである。

しかし、迷っていても仕方が無い。声をかけてみるとか……。

よし！ 声をかけてみよう！

「だ、大丈夫……ですか？」

声はかけてみるも、当然のごとく返事は返ってこない。

どうすればいいのだろう。もう一度声をかけてみよう。

「も、もしもーし。聞こえますかー？」

返ってくる音は皆無に等しい。

や、やっぱりこれってやばいんじゃないか……。きゅ、救急車を呼ん

で……いや、まず図書館の職員の方を呼んできてもらって……ああ

！ どうしよう！ 答えが見つからない！

その時、睦月の顔が浮かんだ。その瞬間、あるひらめきが思いつく。

いつそのこと、睦月さんに一度相談してみるとかどうだろうか？  
自分勝手な判断でこの人を死なせたくないし、的確な判断で症状をよくしたいし。うん、そうしよう！

弥生はさっそくズボンから携帯電話を取り出し、睦月にかけてみた。耳の中に呼び出し音が入る。

トゥルルルルルッ！

出て……お願い、睦月さん。

トゥルルルルルッ！

呼び出し音が途切れ、代わりに睦月の声が響く。

「はい。もしもし。冬川ですが」

「えっと……あの、その……」

かけてはみたのはいいが、自分から睦月さんに電話かけたのは初めてだ。いざ話そうとするも頭のなかでこんがらって言葉が出て

こない。ほんとに、どっ、どっしよ。

「その声は……春野か？」

「えっ、あ、うん。そうなの。じ、実は、睦月さんに相談したいことが……」

「相談？ 何の相談だ」

「実は……」

内心のあたふたを押し殺し、今までの経緯を睦月にことこまかに話す。飲み物を買ったときに少女とぶつかったことや、その少女がそのまま倒れたことなど、すべて。

「と、いう事なんだけど、どうしよう」

弥生は睦月の返答をうかがう。

睦月が少女について尋ねる。

「その倒れた女の子はどんな症状をしているか？」

「え？ どんな症状？ えーとね」

少女の顔を覗き込み、

「なんか汗を多く出してるよ。なんか脱水症状を起こしているみたい……」

と答えた。

睦月は弥生の答えを待っていたかのように平然とつぶやく。

「そうか。おそらく、熱中症だろうな。その症状からすると」

「熱中症……この子、熱中症なの？」

「ああ。おそらくな。一応、春野が日陰に移動させているから、それですこし様子を見ておけばいい。意識が回復するようなら、俺の飲み物をその子にあげて水分補給をさせるんだ」

「わかった」

「春野はその場から移動しないだろうから、今から俺もそっちに向かう」

「睦月さんも？」

「ああ。実際にこの目で症状をみないと確実に判断するのは難しい」「うん、わかった。待ってるね」

「ああ」

睦月との電話が途切れ、携帯をしまう。

睦月を待ちながら少女の様子をうかがう弥生だった。

## 弥生とまだ知らない嵐の予兆

……大丈夫かな？

弥生は一人の少女の顔を上から覗き込んでいた。午前中十一時半ごろのことだった。

図書館の中庭で倒れた少女の顔をうかがってよりそっている最中なのである。

睦月に相談したとき、

「日陰に移動させ、首かわきの下を何か冷たいもので冷やしたら、しばらく様子みるように」

といわれたためだ。熱中症の人はそうやったほうがいいらしい。

自分はそういう知識は持っていないので、どれがいいかはちんぷんかんぷんなのである。

顔色は良さそうだけど……………。

だが変わった様子はなく、あれからどれだけ経ったかはわからない。一時間くらいは経ったような気がする。

睦月さん、来てくれるかな？

うれしさもこみ上げるが、本当に来てくれるか不安もある。確かに、自分は睦月に想いを伝えた。伝えただけで、恋人同士かと聞かれたらはっきりと答えられない。

睦月さんが好きだといってくれたときは心臓が止まるくらいうれしかった。

ああ、自分はこのひとの隣にいてもいいんだって思った。

けど。

恋人なのかは自信がない。

完全に睦月の心境が理解できていないからだろう。  
時折、睦月さんの心の中がわからなくなる時があるから。

やっぱり、睦月さんと恋人なんて、理想が高すぎたのかなあ……。  
無意識にため息が漏れた。

……。いや。今は睦月さんが来るの待つことだけに集中しよう。それ以外のことを考えるのは時間の無駄だ。

気合を入れなおしたら、再び少女の様子をうかがってみる。やはり顔色に変化が見られる様子はない。

変化……。なし、か。

その時。

「おい、春野！」

聞き覚えのある声が耳に入る。周りを見渡し、声が聞こえる方へ耳を傾ける。

そして見覚えのある二人がこちらに向かってるのが目に入った。

「睦月さん……と、葉月！」

睦月が葉月と一緒にやってきたのは予想もしていなかった。そのため声がポリリウムが上がる。

すぐさまハツと口をつぐみ、隣の少女を横目で確認。目を覚ましてはいないようだ。

危ない……。隣に人がいるの忘れてたよ。

「どうしたの。弥生。やばそうな感じの顔して」

心配になったのか、からかうように声をかけてきた。

「ううん、なんでもない……。って「やばそうな感じの顔」って何!?!」

「大丈夫か？ 春野も具合が悪いのか？」

「え？ いや！ な、何でもないの！ 大丈夫!！」

睦月にごまかし笑いを浮かべて答える弥生。

睦月は納得がいかなそうに、

「そ、そうか……」

とつぶやく。

「あ、そうだ。む、睦月さん。あの、さっきは電話ありがとう。睦月さんのおかげで助かった」

「そうか。それは良かった」

今度は安堵の表情を浮かべる睦月。

何も事情を知らない葉月が話に割り込んでくる。

「何があったかは知らないけど、あんたが言っていた「お礼」とやらはどうなったのかしらー？」

「……あ！ そうだった！ すっかり忘れてた！」

葉月言葉で思い出し、飲み物を二人にそれぞれ手渡す。

「ありがとう」

「サンキューね、弥生」

二人はお礼を感情見せずにいう。

睦月が思い出したように弥生に質問する。

「そうだ。春野、倒れたっていうその子の様子はどうだ？ 何か変わったことはあったか？」

その質問に見たこと、ありのままを答えた。

「ううん。別に変化はない。顔色はいいけど、具合がいいかまではちょっと……」

「そうか。わかった」

睦月は何事もなかったかのような顔を見せる。

そこに葉月の不満そうな声が漏れてきた。

「あーあ。二人でなにやら楽しそうよね。私一人だけ仲間はずれ？」

「葉月……どうしたの？」

弥生はきよとんと首をかしげる。

そんな弥生の顔に目が行くと葉月は愚痴をこぼす。

「どうしたもこうもないわよ。その子一体誰よー？」

「誰って、さあ……？」

「さあって、私は何も知らないでここにやってきたのよ？ それなのに、弥生と睦月さん二人で勝手に盛り上がられたら、さびしいじ

やない」

葉月が葉月がここまでの事情を知らないことに気づく。そうだ。葉月はこの子のことまだ何も知らないんだった。おそらくどうしてこの子がいるのかもわからないだろう。なにせ、睦月にしか話していないのだから。

睦月さんが来てくれたことに舞い上がってすっかり忘れていた。

やっぱり、葉月に話しておいたほうがいいよね。

葉月はみんなわいわい楽しむのが好きな性格で一人や仲間はずれなことはあまり好まない。

弥生の目が自然と少女の方に向かれる。

この子のこともいちから話しておいたほうが葉月は安心するだろう。話したら何か力になってくれるかもしれないし。人を手助けするのに人数は多いほうがいいよね。

よし！ 葉月に話そう！

「葉月、実はあのね……………」

弥生が葉月に声をかけようとしたとき。

弥生の隣からうめき声のようなものが聞こえてくる。

よく見ると、どうやら少女が意識を取り戻したらしい。

「よかった！ 気がついたんだね！」

安心して全身で息をする弥生だが、葉月に事情を説明することは頭から抜けてしまったのだった。

\*

時間を戻して十一時半ごろ。

スリジエの意識は夢の中へと引き寄せられていた。

スリジエのまぶたがゆっくり上がりられる。地平線のように辺りは何もなく、障害も無い。上も下も右も左も新月のごとく真っ黒に染

まる暗闇の世界は、どこか恐怖が芽生えてくるほど恐ろしい。一人でここに居るのは少々辛すぎる。

ここは……どこかしら？

自分がなぜここに居るかもわからない。この世界が何なのかも。

もしかしてここは……夢の中？

図書館とやらについて歩いたときから意識がない。もしかして…

…。

周りを見渡してみる。が、どこもかしも真っ暗。一つだけわかるのは、自分の身体が闇を照らす光の代わりになっているということだけ。

再び辺りを見渡したとき、一筋の光が目の中に映りこむ。よく目を凝らすと人影のようだ。

だが。

あのシルエットは……？

スリジエには見覚えのある人。忘れるはずがない、スリジエが一番尊敬する人。

「チェリーお姉様！？ どうしてここに！？」

本音が声に出してしまう。

夢枕に立つてくれたのだろうか。それともただの幻だろうか。

それでもかまわない。少しでもチェリーお姉様とお話できるのなら。たとえ夢の中でもかまわない。

スリジエが走り出したとき、チェリーも後ろにバックするかのように遠ざかっていく。

「待って！ チェリーお姉様！」

手を伸ばしてみるも届くはずはない。

まだ、何も話していない。一言だけでいい。

チェリーお姉様とお話したい……。

スリジエの願いもむなしくチェリーは遠ざかっていき、闇の中に吞まれていった。

そんな……。

再び全身の力が抜けていくような感覚になる。

スリジエ……。

突然、声はどこからか話しかけてくるように聞こえてくる。

スリジエ……。

「チエ、チエリー……お姉さま？」

まぎれもなくチエリーの声。間違えるはずが無い。

スリジエが振り返ると光で包まれた体が透けているチエリーの姿があった。

「チエリーお姉様！」

スリジエ……久しぶりね。何日ぶりかしら。

「チエリーお姉さま……どうして、どうして死んだりなんか……」  
それしか言葉が出なかった。出てこなかった。目には涙でいっぱいだった。

スリジエ。自分を見失っちゃ駄目よ。

「え？ 自分を……見失う？」

スリジエは反射的に顔をあげる。

意味がわからなかった。どういうことだろう。

あなたが求めるものはもっと別にあるわ。真実からそむいたり駄目。すぐそこに真実が必ず眠っている。

ますます混乱しそうになる。それって、仇が自分が思っている人じゃなく、もっと別の……。

スリジエ。自分を見失わないように気をつけて。あと、『あいつ』がまもなくこの海堂町に……。

「チエリーお姉様!？」

チエリーの体が足から崩れるように消えていくのわかる。

「待って！ まだお話したいことが……」

夢は残酷なものだ。肝心なところで夢の世界から引き離されていく。そう、肝心なところで。

スリジエの意識は再び現実世界に戻される事となった。

「ん……うっん………」

スリジエが目を開けると見知らぬ少女が顔を覗かせるように見つめていた。

「よかった！ 気がついたんだね！」

安心したような明るい少女の声。

声を聞いて場所が変わっていることに気がつき、はっとする。しかも、少女一人だけではなく、顔立ちが整ったスリジエ好みの少年。翡翠色した長い髪を一つにまとめ、自分と変わらないような胸を持つ美少女。

「こ、ここは一体………」

ただ独り言のように発する。

確か、自分は城からこの海堂町の浜辺に着いて、カップルから図書館の聞きだし、向かっていたはず。そして図書館にたどり着いて……そこまでは覚えてはいる。少し歩いて、そこで意識が……。

ああ。自分は倒れたのね。

倒れたということは、刻々と時間が迫ってきているということ。やばいわね。

そこにさっきの顔を覗かせていた少女が声をかけてきた。

「大丈夫……？ もしかして……まだ具合、悪いの？」

考え事に集中していたために反応が遅れてしまう。

「え？ あ、ああ。大丈夫よ。心配してくれてありがとう」

「そう？ 中庭で飲み物買ってたら、あなたがやってきて、ぶつかったと思ったら急に倒れるからびっくりして……なんとかして知り合いの男の子に相談してここまで移動させてきたの」

「そう、なの………」

やはり、この中庭で倒れたのは間違いないらしい。

やっぱりこの『作られた人工の体』じゃ持たないのね。

せっかく、チェリーお姉様が復活してくれたのに。どうして自

分の体は言うこと聞いてくれないのだろうか。

やっぱり自分なんかが仇を見つけないなんぞ、無理があったのだろうか？

勝手に城を飛び出して、勢いを付けすぎたのだろうか？

どちらにしてもがんばりすぎて無理をしたということ。

もう、あきらめようかしら？ 仇探しなんか。

その時、鮮明に蘇える夢の中で言ったチェリーの言葉。

あなたが求めるものはもつと別にあるわ。真実からそむいちや駄目。すぐそこに真実が必ず眠っている。

私が求めるものはもつと別にある……。

チェリーお姉様は昔から変わらないわね。

かすかにスリジエの口元が緩んだ。

だからこそ……だからこそ、やっぱりチェリーお姉様を殺した奴は許せない！ どんなにしても！

絶対仇を見つけて、見つけたら……私は、どうなるんだろうか。

仇のことを考えるあまり仇を取ったあとの事は考えていなかった。仇を取ってももう、私は生きてはいない。でも元々一度は死んでいくのだからしょうがないけど。

でもやっぱり、どうなってしまうのだろうか。私の体は。

しばし考えてみるが、なにも浮かばない。

考えてもしかたがないか。その時が来たら考える事にしよう。

スリジエは自分を凝視しながらしゃべる少女を横目にため息をつくのだった。

\*

十一時四十分になったときだった。

図書館の中庭では弥生が目を覚ました少女に声かけようか、タイミングをうかがっていた。

はつきりとした理由はない。ただ単に少女の具合が本当に良くないか確認したいだけなのだ。

「あ……」

声は出るも、少女はなにやら考え事をしているようで、声がかげづらい。

もう一度挑戦。

「あ、あのっ……」

言葉にはなつたが、声が小さすぎて少女の耳には届かない。

こ、今度こそ！

と、思ったとき、少女が難しい表情で空を見上げる。

具合でも悪いんだろうか？ やっぱりまだ熱中症が治っていないとか……。

心配になった弥生は少女に念のために聞いてみることにした。

「大丈夫……？ もしかして……まだ具合、悪いの？」

「え？ あ、ああ。大丈夫よ。心配してくれてありがとう」

「そう？ 中庭で飲み物買ってたら、あなたがやってきて、ぶつかったと思ったら急に倒れるからびっくりして……なんとかして知り合いの男の子に相談してここまで移動させてきたの」

「そう、なの……」

その表情はどこかさびしそうだ。この表情、睦月さんが見せる表情に似てる……。

やっぱりどこか悪いのかな？

少し経ったとき、ごほごほと咳き込むような音が響いた。

この咳はおそらく少女のものだろう。

「大丈夫！？ やっぱりどこか具合悪いの？ 悪いんだったら……」

弥生はそういつてみるも少女の方は、

「ほんとに大丈夫だから……心配してくれてありがとう」  
青ざめた顔で受け流す。

大丈夫、大丈夫ってそんな顔で大丈夫って言われても……。  
余計に不安が重なっていくだけなのだが。

やっぱりしつかりとした病院に見せた方がいいかな？ いや、病院はお金かかるし、私はそこまでお金もっていないし……お金がからないでこの子の具合がよくなる方法は……。

考えるも頭がいいほうではないので、思いつくはずはない。

さっきの少女のように考え事をしている弥生を見て思ったのか、葉月がつぶやいた。

「弥生、さっきから何難しい顔してんのよ。まるで『昔の弥生』に戻ったって感じね」

え……？ 昔の、私……？

それを聞いた直後、昔のトラウマがさかのぼるかのように鮮明に蘇えっていく。

弥生の背中に怪談話を聞いたような鳥肌が立つ。そして、身震いが止まらなくなる。と同時に過去のトラウマがビジョンとして映りだす。

夜……。

監禁……。

暗闇の海。誰も助けにこない孤独な空間。

私、私は……。

昔のあの事件のことが頭から離れなくなっていく。

どうしよう。どうしよう。誰か……助けて……。

「どうしたのよ。どんどん難しい顔になっていくわよ」

葉月の声で我に戻り、平然とした顔でしゃべる。

「何でもないよー！ ただ、昔っていつだったけーって考えてただけ！」

「昔って……あなた、まだ生まれてからそんなに経ってないでしょ」  
葉月のいつものあきれた声が耳に入った。

ごまかしはしたものの、やっぱり複雑な感情は抜け切れない。  
一度思い出した記憶を忘れようとするのは難しいらしい。

こんなんじや、明日の学校いつもどおりいけないかも……。

弥生がそう思っていると、葉月が声を出す。

「弥生、私図書館の職員の人と話して、医務室入れないか聞いてくるわ」

「え……急に突然……」

弥生は顔を見上げたが、既に葉月の姿はなく葉月の後ろ姿だけが  
かすかに見える。

足が速い……葉月。

でも、私まだ事情話してないんだけどいいのかな……？

といつてももう、葉月は行ってしまったのにいまさら言えないし

……。

かといって、葉月を仲間はずれにはさせたくないし……。

隣の横たわる少女をちら見する。

またさつきと同じように考え事をしているよう。

声、かけてみようかな……。

ほんの少ししか話していないとはいえ、やはり名前ぐらいは名乗  
らないと相手に失礼だ。一度顔を合わせて知り合いになっていれば、  
この先友達になれる可能性もあるだろうし。

よし！ 自己紹介しておこう！

そう意気込んだものの……。

弥生は過去の記憶が頭から離れなくなっていた。そのためか、声  
かけようにも声かけていいのかためらっている。

……駄目だな、私って。

やっぱりどんなに前世の記憶があろうとトラウマはトラウマ。消  
えることがない。一生消えないものなのね……。

無意識に少女に目が行ったとき、少女が立ち上がるうとする場面

が映りこむ。

だが、身体が完全に治りきっていないためか、すぐにふらつき元の仰向けの状態に戻る。どこか過去の事にあがく昔の自分のようだった。

弥生はいつしか少女を『昔の自分』と照らし合わせていた。

過去にあがいてあがいても、起きてもう終わってしまったことは変えられない。どんなにしても。

過去は過去。今は今。だからこそ、もう、二度とあんなことにならないように、同じ目に遭わない未来にするために今まで生きてきた。今もそうだ。過去は変えられないが、未来は変えられる。未来は必ずこうだと決まったものはないのだから。

突然、少女の息が荒々しくなった。

思わず少女に目を見張る。

「やっぱり、少しの間休んでおいた方がいいよ。無理しちゃ余計に身体を壊すだけだし」

「そうね……」

少女はただそれだけ交わした。

優しくゆるやかな風が吹き込み、少女の長い髪がふわりと宙に浮く。藤のようなあざやかな色の髪が揺れる。

綺麗な髪だなあ……。

そのゆれる髪に見とれてしまう。

私もこの子の髪のように心が軽くなる日って来るのかなあ……。  
来るといいなあ……きつと。

不安を募らせながらも、青く澄んだ空を見上げた。

\*

時間を戻して十一時四十分。図書館の中庭にて。

葉月は弥生を落とし入れる作戦を考え込んでいた。弥生に復讐しようと思いついたのは、自分が好きだった男の子を弥生にとられたからだ。それ以来、弥生に復讐するために生きてきたようなもんだ。後ろでひざまずき、少女に寄り添う弥生を見る。倒れた少女の具合が気になるようだ。そんなの、ほっとけばいいものを……。まあ弥生の性格上、ほっとくことが出来ないからどうすればいいか困っているのだろうが。

とはいえ、作戦を立てるにしろ、弥生にばれたら元も子もない。あの弥生が気づくはずがないだろうが。しかし、睦月さんは頭がいい。何をしようとしても気づかれる恐れがある。ここは慎重に行くべきだろう。

作戦は何がいいかしら。

表情はいつもどおりの顔でこなしながら、頭の中をフル回転させていく。

オーソドックスにささいなものでいじめていくというのはどうだろうか。だが、学校は明日だ。今行うものではない。ここでできるものでもない。ということはこの作戦は没だ。

次に嘘の噂を流して弥生の心を至らしめるといっのはどうだろう。だが、問題は『噂の内容』だ。噂の内容によって、デマだと判断させられる場合もある。弥生を落とし入れるための明確な嘘の内容がなくてはいけない。これは一時保留にしておこう。あとで何かに使えるだろう。

次は……………。

葉月の目が弥生と少女に向いたとき、ある事が思い浮かぶ。

そつだ……！ 弥生のこの状況なにかに使えるだろう。最近、図書館を荒らし、図書館にいる人が襲われる事件が発生している。何かに使えるかもしれない。とはいえ、弥生はまだ中学生だ。この状況では犯人にするには難しい。しかも、犯人は計画的に事件を起こしている。頭が悪い弥生には到底無理なこと。だが、名目上は少女を助けるために図書館の職員を呼びに行くということにすれば、自

分自身の株が上がる。弥生は無理だろうが。

まあ、それも悪くないわね。

その時、弥生が難しい顔して少女を見つめる光景が入る。

何か動揺させることができるかもしれないと思いつつ。

葉月は思ったことを口にする。

「弥生、さつきから何難しい顔してんのよ。まるで『昔の弥生』に戻ったって感じね」

その瞬間、弥生の顔がみるみるこわばっていき、青ざめていく。

どうやらあの言葉は効いたようだ。

だがあれだけじゃ不自然に思われるかもしれない。

念のためにからかっておくか。

「どうしたのよ。どんどん難しい顔になっていくわよ」

葉月の声で我に返る弥生。

「何でもないよー！ ただ、昔っていつだったけーって考えてただけ！」

「昔って……あんだ、まだ生まれてからそんなに経ってないでしょ」

あきれようにつぶやく。

これなら大丈夫だろう。

さて……作戦を実行するのでしょうか。

葉月は平然とした顔で言う。

「弥生、私図書館の職員の人と話して、医務室入れないか聞いてくるわ」

「え……急に突然……」

後ろを振り向き、事務室があるほうへと猛スピードで駆けていく。

走りには誰にも負けない自信がある。

これだけ走れば誰も追いつけは出来ないだろう。

葉月は睦月にほめられる妄想をしながらかけていったのだった。

弥生、何故か少女に攻撃される!?

十一時五十分ごろの図書館の中庭。

睦月はずっと弥生の様子に気になっていた。弥生が葉月の言葉を聞いてから顔色が一変したからだ。

弥生、さっきから何難しい顔してんのよ。まるで『昔の弥生』に戻ったって感じね。

そもそも葉月があんなこと言い出したことさえもわからない。言う理由なんてあるのか？

まるで昔の春野に戻った……？　ということは昔の春野は今日の前にいる少女のようだったということか。そもそも春野と秋村は親友同士だろう？　親友を傷つけるようなことはしないはずなのに……。あまりにも不自然すぎる。もしかして傷つくとわかっていた上で弥生にわざとあんなこと言ったのだとしたら……。秋村は油断できないな。念のために弥生の葉月の印象聞いた方がいいだろうか？　一応春野に聞いてみるか……。

睦月が弥生に声かけようとしたとき、弥生の表情が青ざめていた。春野……？

やはりあの秋村の言葉を気にしていたりしないだろうか？　あきらかに顔色がおかしい。

そのとき、葉月が弥生に声をかける。

「どうしたのよ。どんどん難しい顔になっていくわよ」

葉月の声で我に戻った弥生が、平然とした顔でしゃべる。

「何でもないよー！　ただ、昔っていつだったけーって考えてただけ！」

「昔って……あんだ、まだ生まれてからそんなに経ってないでしょ」

葉月のあきれた声が耳に入った。

やっぱり春野は無理しているようにしか見えない。

「春野……？」

と声かけてみるも返事はなし。

大丈夫だろうか？ それがきつかけで立ち直れなくなるとかにならないだろうか？

やっぱりあの葉月の言葉が関係しているだろうな。そうとしか考えられない。

まさか！

秋村の言葉を気にして怖がっているとかじゃないだろうな。

だが、あの春野の表情からしてあきらかにそうだろう。

しかも、表情が最初に声かけたときに戻っている。

困っているようで、どこかさみしそうな表情。迷っているようにも見て取れる。

やっぱり声かけたほうがいいだろうか？

そう悩みつつも声かける睦月。

「春野……大丈夫か？」

葉月のあの、

弥生、さつきから何難しい顔してんのよ。まるで『昔の弥生』に戻ったって感じね。

という言葉が頭の中で繰り返し再生される。

だがそれを振り切って弥生に声かけた。

「春野！」

睦月が懸命に声かけた事で弥生は自我を取り戻す。

「え……睦月さん？ 私……あれ？」

「何があったかはわからない。だが、気にするな。前を見ていけばいい」

「睦月……さん」

「とにかく、あとは……ん？」

睦月が周りを見渡したとき、いつのまにか葉月の姿が消えていた。

どこに行つたんだ？

「春野、ちよつといいか？」

「睦月さん、どうかしたの？」

「ああ、ちよつとな。秋村の姿が見えないんだが、どこに行つたか知ってるか？」

「んー、そういえば……図書館の職員の人と話してくるって」

「理由かなんか言つてなかったか？」

「確か、この子を医務室に入れないか聞いてくるとか……葉月って優しいよね」

「あ、ああ……そうだな」

本当にそれだけか？ それだけの理由で行くのか？ 今まであつてきた秋村の感じではそうには思えなかった。何か企んでいたりするのか？ 一応探して本人に問いただしてみるのがいいだろうか？ 念のために探すか？ 目的地も決まっているから探しやすいとは思うが……。

睦月はそう意に決めると具合が悪そうな少女に自分の飲み物を手渡しつばやく。

「良くなつたとはいえ、こまめに水分補給は必要だ。嫌いかもしれんが、これを飲んで水分補給をしてくれ」

睦月の飲み物を受け取ると軽く目を瞑って会釈をするような動作をする少女。

「それと春野」

「なあに？」

弥生に近づき少女に聞こえない程度で話す。

「あと、秋村には一応気をつける」

「え？ 葉月に？」

「ああ。何考えているかはわからないが、とにかく気をつける」

「え、ああ、うん。わ、わかったよ」

「俺は念のために秋村を探してくる。もし、話がこじれていらない誤解が生じたあとじゃ遅いからな」

「わ、わかった……」  
弥生は戸惑うようにうなづく。  
弥生のうなづきを見てうなづき返す睦月。そして、事務室に向か  
って走っていった。

\*

というか、この世界に住む人々は何故あんなにも優しいの時刻が  
正午に変わったとき、図書館の中庭にいるスリジエは自分を助けて  
くれた少女と二人っきりになった。スリジエは水分を補給したりし  
たおかげでだいぶマシになり、起き上がっている。さっきやってき  
たあの二人はそれぞれどこかに行ってしまった。

まだ、お礼言っていないのに……。だろう？

どうして自分になんかかまってくれるのだろう？

今の国王すらかまおうなんてしてくれないのに……。

そんなスリジエを心配してまたもや少女が声をかけた。

「大丈夫？ やっぱりもうちょっと寝てた方が……」

「どうして……」

声が上がりにながらも、自然とその言葉が口に出た。

少女が「え？」と声をあげ、首をかしげる。

スリジエはキッと少女をにらみつけたとき、一粒の涙が落ちた。

「どうして!?! どうしてそんなに優しくしてくれるの!?! 見ず

知らずの人を助けるなんて!」

少女は最初はびっくりしていたが、すぐに母のようなふんわりと  
した雰囲気になる。

「『どうして』なんて理由はないよ。倒れている人をほっとくなん  
て私には出来ないもん。それに……」

「それに？」

「それに、助けるのは当然だよ。困ったときはお互い様だしね」  
少女の笑顔はスリジエにはまぶしかった。

「もし……その人が助けるのを断っても？」

「無理にでも助けようとしちゃうかも」

その面影はどこかチェリーに似ている。厳しいようで優しさがある。そんな感じ。

この世界の住人はどうしてこうも優しくしてくれるのだろうか？  
それでもまだなお、優しくしてくれるなんて……。

スリジエの胸がいつぱいになる。

そこでふと感じる。

それに比べて私は仇に討とうということしか考えてない。そんなこと全く考えようとしなかった。

私は……なんて惨めなオンナなの。

きゅつと唇を締める。

お礼、言わなきゃ。

そう脳裏に浮かんだとき、あることに気がつく。

そういえば、私まだこの子にお礼すらしてないわ。私を熱中症から助けてくれて、それでもまだ付き添ってくれている彼女をお礼もしようとしないうち……。

「あ、あのっ！」

スリジエは少女に声をかけると、思い切って言うしてみる。

「た、助けてくれて……あ、あり、ありがとう。そ、その……た、助けてくれたお礼に……」

「え、お礼？」

少女はスリジエの言葉に反応するが、

「別にいいよ。私が勝手にやっただけのことだし」  
と断られてしまう。

でも、正直に自分の気持ちをぶつけるスリジエにとって、何もしないで終わるといふのは気が引ける。

「でも、何もしないほうが失礼かと……」

「そんなことないよ。『ありがとう』の言葉が聞けただけでもうれしいもん」

「そ、そお、かしら……」

不甲斐ないというか、何もしないほうが退屈というか……。だが、今の自分の身体で魔法を使うとどうなるか、自分が一番よく知っている。

退屈そうなスリジエに少女が気にかけてたのか、こんな話を切り出す。

「き、気にしないで！ 私なんか、助けてくれた人にお礼をしようとしたら誘拐されたことあったし！ 滅多にないよ！ そんな事！」

え？ 誘拐……？

顔が自然と少女の方に向く。

「でも、結局誘拐は失敗に終わったみたいで。人質の私は夜の海に投げ落とされておぼれ死にかけたけど……海から助けてくれたひとが救急車を呼んでくれてね。そのまま救急車に運ばれて、なんとか命を取り留めたけど」

少女の話を聞いて心の中で激昂した。

なんとひどい話だ！ 誘拐が失敗に終わったから人質を殺す？

どこのどいつがそんな卑劣な真似を！ 人の命をなんだと思ってる！ まるで『あいつら』のような奴らだ！

スリジエはそこで疑問を抱き、その疑問を少女にぶつけてみる。

「そういえば、誘拐が失敗に終わったというけれど、何故失敗に終わったの？」

「あ……それは……」

少女はスリジエの質問に戸惑いを見せたが、ためらいながらも重い口を開く。

「実は、私……、両親がいないの」

「え……」

「生まれたとき、捨てられちゃって。そのあと両親は死んじゃって

……だからそのことを誘拐犯は知らなくて、私を誘拐しちゃったから……」

「でも、兄妹は……？ 兄妹はいるんじゃない……」

スリジエの質問に首を横に振ると話を続けた。

「ううん、いないの。私、最初から一人っ子だし。一応おばあちゃんがいんだけど。もう亡くなったけど。その日はおばあちゃん外出して家にいなかったし」

ということは家の中はもぬけのから……ということ。

そうか！

誘拐したらず、人質の家に電話して自分達の要求する。だが、この子の場合は違った。この子の両親はすでに他界し、その日は運悪く祖母も家にいない。電話しても誰も出ないのは当たり前だ。誰も家にいないのだからな。

こういうのは頭の悪いやつらが失敗するところだ。計画性がなく、いきあたりばつたりの行動。それが結果的に自分たちを破滅に追い込むことになるとは思いもしなかっただろう。

もっとこの子の事を知りたい。この子が嫌じゃなかったらこの子とお友達に……。

「ごくりと生唾を飲み込むと、おそろおそろ尋ねる。

「あ、あのっ……もし良かったら名前……」

「あ！ 名前乗るの忘れてた！」

少女はそう叫ぶと答えた。

「私の名前は春野弥生っていうの。よろしくね」

名前を聞いた直後、驚きのあまり声が出そうになった。

この、この子が……仇の春野弥生？ 馬鹿な。チエリーお姉様を殺した仇はもっと……。

もしかしてチエリーお姉様の言ったとおり、自分が求める仇はもっと別に……でも。

あなたが求めるものはもっと別にあるわ。真実からそむいや駄目。すぐそこに真実が必ず眠っている。

でも。信じられない。この子が春野弥生だなんて。

私は……何を信じれば……………。

スリジエが動揺していたとき、なにかがスリジエの身体を支配した感覚に陥った。

そしてそのままスリジエの意識は異空間へと閉じ込められたのだ。  
った。

\*

十二時十分になった時。

弥生は少女に自分の身の上話を聞かせていた最中だった。

「でも、結局誘拐は失敗に終わったみたいで。人質の私は夜の海に投げ落とされておぼれ死にかけたけど……海から助けてくれたひとが救急車を呼んでくれてね。そのまま救急車に運ばれて、なんとか命を取り留めたけど」

何故自分が過去の話をし始めたのかは自分でもわからない。

もしかすると、少女を退屈させないためにしてるのかもかもしれないし、誰かに話して過去を振り切つて前を向きたかったのかもしれないし。おそらくどっちとも正解だろう。

最初、少女が退屈そうな表情をするもんで、共通の話題か何かで切り出そうとした。が、少女の好きそうなものを知らないため、話題に戸惑う始末。拳句の果てに自分は葉月のようにそんな情報をもっていないのでどれがいいかは全くわからない。ということ、自分の身の上話をして興味を引いてもらおうと考えた結果である。だが予想外に少女は自分の話に食いついてくれた。

それだけでも安心感があった。

弥生話を聞いていて疑問を抱いたのか、少女がその疑問を弥生にぶつけてくる。

「そういえば、誘拐が失敗に終わったというけれど、何故失敗に終わったの？」

「あ……それは……」

弥生は少女の質問に戸惑いを見せたが、ためらいながらも重い口を開く。

「実は、私……、両親がいないの」

「え……」

「生まれたとき、捨てられちゃって。そのあと両親は死んじゃって……だからそのことを誘拐犯は知らなくて、私を誘拐しちゃったから……」

「でも、兄妹は……？ 兄妹はいるんじゃない？」

少女の質問に首を横に振ると話を続けた。

「ううん、いないの。私、最初から一人っ子だし。一応おばあちゃんがいんだけど。もう亡くなったけど。その日はおばあちゃんはお外出して家にいなかったし」

弥生は思い出したとたん、涙が出そうになる。

やっぱり私って馬鹿だな。自分の過去を他人に話すなんて。

もっと……マシな話をすればよかった。  
でも。

それそれとして。

自分の過去の話をおんな顔で聞いてくれた人は初めてだな。今まで、私を何か悪い事やったから誘拐されたんじゃないかって変な噂が立ってまともにもみてくれなかったし。

この子も、私と同じように身内の人を亡くしちゃったのかなあ。  
そんな風に思えた。

でも、うれしいな。仲間が出来たみたいで。

自然と笑みがこぼれた。

その時少女が弥生におそろおそろ尋ねる。

「あ、あのっ……もし良かったら名前……」

「あ！ 名前乗るの忘れてた！」

弥生はそう叫ぶと答えた。

最初に会ったら自分の名前を名乗るのがマナーなのに、なんてこった。この子を心配するあまりすっかりわすれてた。馬鹿にほどがある。損した気分になる。

この子に申し訳ない……。

「私の名前は春野弥生っていうの。よろしくね」

少女が驚きのあまり声が出そうになった。

その表情にぬぐえない違和感を感じる。

私、何か変な事言ったかな。でも気に障ること言ったのかも。

時々、自分でも無意識に言葉を人を傷つけてしまうことあるから。

それかな？

でも……。

出来るならこの子とお友達になりたい。お友達になっていろいろなことしゃべりたい。

しゃべったり、どこかに遊びに行ったり、普通の子達がやるようなことをやってみたい。

けれど。

こんな私、受け入れてくれるんだろうか。

水が使える能力があるっていうだけで私の周りの人たちは、

《何もない場所から出すなんて！ バケモノだっ！！》

《どうして私があんと一緒にいなきゃいけないの！ きもちわるい！！》

《こっちについてこないでよ！！》

自分をのけ者扱い。そんな力を持つてるだけなのに？

どうしてって思った。だから、友達なんかいららない。

こっちから断ち切ってやる。

そんな思いで日々すごしてきたけど……。

でも、この子は違った。私の過去を知っても真剣に耳を傾けてくれた。

それに……。

自分でも良くわからないけど、この子は私の力のこと知っても普通に接してくれそう。

これはただの直感。みたたんにすぐに思った。この子となら…

だから……だから、この子とお友達になる。絶対。

弥生が心の中で決意したとき、突然空気が変わった。

(空気が……変わった?)

私の中にあるリアアの魂が目覚め、そう感じさせる。

なにかが起こる。

いままでの経験ですぐにわかる。

一体何が……。

弥生が油断していると、火の玉が黒くなったかのような玉が数個同時に弥生の背中めがけて突進する。黒い玉の数個の内、二つが肩甲骨あたりに直撃。

突進された弥生は体が吹き飛ばされ、左半身を思いつきり木にぶつけてしまう。木は大きく揺れ葉っぱがひらひらと数枚舞い落ちる。

左ほほがぶつけた拍子でりんごのように染まる。というより赤く腫<sup>は</sup>れていく。

「いい気味ね」

弥生の耳にはそう聞こえた。

弥生が顔の向きを変えると、いつの間にか立って弥生を見おろす少女の姿。

「ど、どうして……」

ただそれしか言葉に出来なかった。

「どうして? 私の姉さんを、……殺したくせに!!」

弥生はその言葉の意味すらわからなかった。

こ、この子のお姉さんを……私が、殺した?

馬鹿な。この子とは今日が初対面だし、まずこの子の家族構成なんか全く知らなかった。

この子にお姉さんがいるだなんて、今知ったばかりなもの。

弥生が戸惑っていると、少女が大きく後ろに下がり両手を広げる。両手の上に、今度は新月のようなまるい球体が姿を現す。そして両手を重ね合わせると、その二つの球体も合わせる。何をやる気だろう……。

嫌な予感がする。まさか、あれを私に向けて攻撃してくるんじゃない……？

そう思ったとき、案の定。

一つになった球体が車のスピードのごとく猛烈な速さで弥生にめかけてやってきた。

やばい！

攻撃された背中がまだ痛みつつ、起き上がると木を盾にして木の後ろに隠れこむ。

間一髪、球体は木にぶつかる。球体にぶつけられた木は再び大きく揺れ、へこむように球体がぶつかった跡が残った。跡にはまだ冷め切っていないためか、煙がのろしのように漂っている。

どうしよう。このまま隠れているわけにはいかないし、かといってにげるわけには……。

仕方が無い！

睦月さんが帰ってくるまで、時間を稼いでいるしかない！

睦月さんが帰ってきてくれれば、何か手を打ってくれるはず。

少女が声を張り上げる。

「隠れても無駄よ。私にはわかるわ。あんたがどこにいるかは」  
弥生は無我夢中で飛び出すと自分自身を囷に使った。

\*

同じく十二時ちょうど。

睦月は事務室がある建物の玄関入り口前まで来ていた。何か企んでいると思われる葉月を探しにきたのである。葉月が弥生に何かすると思いい、心配になったからだ。

やっぱりいないか。

周りを確認してみるが葉月らしき人物は見当たらず。気配は感じるのである。

やはりとは思ったが……どこかに隠れたか。

睦月は考え込むように視線を変える。

三百六十度見渡しみるも、葉月が現れる気配はない。やはりどこかに隠れてしまっているようだ。

もつとくまなく探すか？

いや、これ以上の詮索は難しいだろう。もし、春野の元に戻ったとき、どこに行つて何をしていたか、言い訳が難しい。しかも相手は葉月の親友。余計な一言で関係をこじらせたくはない。

あいつを傷つける真似はできない……。

視線を移したときに玄関入り口に目が止まる。

おそらくあれは『移動封じの魔法』だろうか。なにやら結界らしきものがかけられていた。

うかつに入れないな。それに、入れば相手の思う壺だ。葉月はとにかく容赦ない女なのである。相手が油断してひっかかった所をしとめる。それが奴の手口。まあ、それはともかく……。

ここにいるかどうか、秋村の名前を出して反応を見てみるか。

睦月は葉月にしか聞こえないように、魔力を使いながらテレパシィで叫んだ。

『秋村ー！ 聞こえるか！』

だが反応なし。もう一度やってみよう。

『秋村！ 何が目的で企んでいるかはわからん！ だが、春野はお前の親友だろう！ 親友なら親友を信じろ！』

やはり声は聞こえもしない。駄目か。魔力をとめて、テレパシィをやめる。そして余計なものが入り込んでこないよう、見えないフ

フィルターでシャットする。

よし！ これでいいだろう。

しかし、睦月には葉月のことよりも気がかりなことがあった。弥生のことである。

弥生の表情がどうも気になる。やっぱりまだ気にしていないだろうか？ 余計なことを言い過ぎてしまっただけではないだろうか？ あの少女と上手くやれているだろうか？ とにかく弥生が心配でならないのだ。

それそれとして。なんだろう。このとてつもない不安感は。

嫌な予感がするな。

この予感は当たる気がする。そのためにも一度、中庭に戻ろう。

睦月は走り出そうとするが、一度脚を止め振り返った。

複雑そうな顔で見つめると、再び脚を動かして中庭に急いで行った。

無事でいてくれよ。

睦月はただそれだけ願った。

\*

十一時四十分ごろの事だ。

葉月は事務所の中に来ていた。事務所の玄関は小さな病院の待合室のような小さな窓が見受けられる。広さもそれほど広くはなく、豪邸の玄関とそれほど変わらない広さだ。観音開きの入り口の両脇には一人一人が隠れそうなスペースがある。おそらく柱だろう。もし。何かあったとき、ここに隠れるとよさそうだ。

……あとは、事務所にいる職員の人たちに弥生をあの手事件の犯人だと思わせれば 完璧ね。

あの事件の犯人は中学生ではないかと、ほとんどの図書館の職員

の人たちはおもいこんいる。だとすれば弥生があ的事件と思わせるような証拠を突き出し、あることないこと言いふらせれば……。靴を脱いでスリッパに履き替えようとしたときだった。

睦月が葉月にしか聞こえないように、魔力を使いながらテレパシ―で叫んできたのである。

『秋村―！ 聞こえるか！』

葉月は思わず反射的に体をびくつかせてしまう。

な、何なの……？

睦月に自分の心境までは聞こえない。自分も睦月と同じようにテレパシ―で叫ばないと、自分の声は睦月に届かないのだ。

『秋村！ 何が目的で企んでいるかはわからん！ だが、春野はお前の親友だろう！ 親友なら親友を信じろ！』

その言葉にまぶたをかすかに動かす。

弥生を信じろ……ですって？ どうして睦月さんがわざわざそんなことを？

まさかっ！

何か思いついたのか、顔を玄関の入り口に向けた。

私の計画がばれた？ どうして？

眉をひそめつつも、玄関の入り口にある左脇の柱に隠れる。もし自分がすでに玄関の中にいると睦月にばれると、それはそれでやっかいなことになる。それは嫌だ。

柱に隠れながらも、わずかにもれる音に耳を澄ませていく。足音だ。だがこんなところに人がいた気配はない。あるとしたら、さつきテレパシ―で聞こえた睦月さんしか……。

睦月だ！

睦月さんが玄関に向かってる！？

葉月に冷や汗が流れ、心臓の鼓動が早まる。テレパシ―は約一メートルから二メートルまでしか届かない。だとすれば、睦月はすぐそこまで来ているという事だ。

見つかる。睦月が玄関を開けて入ったとき、真っ先に見つかった

しまつ。どうしよう。

あせつていたとき「ある事」を思い出す。

……そうだ！ 魔法だ！

念のために玄関の入り口に『移動封じの魔法』を仕掛けておいたのを忘れてた。今のうちに発動させておけば、そう簡単には近づけまい。近づくと魔法の中に一定時間閉じ込められてしまふ。中ではどうする事もできない。外から破るしか方法はない。

葉月は小さくうわごとのように呪文を唱えた。

「ダブルゲート・ムーブ」

呪文を唱えた瞬間、入り口いっぱい大きな魔法円が浮き出てる。

これでよし。あとは睦月さんの出方を見るのみ。

だが、足跡が近づいてくる気配はない。それどころか足跡は遠のいていく。

柱から顔を出して確認してみる。

早歩きで事務所をあとにする睦月の後ろ姿がちらっと見えた。

後ろ姿も素敵ね、睦月さんは。

やっぱり、睦月さんは自分のものになる運命のヒト。弥生なんか似合わない。

そのためにも、睦月さんと弥生を引き離す必要がある。

絶対モノにしてみせる！

葉月はほくそ笑むと、中へと入っていった。

## 弥生と嵐のような中庭

十二時十分ごろになったときだ。

睦月は事務所の玄関前から図書館の中庭付近まで、走ってやってきた。

今の睦月の頭の中は弥生ことで、いっぱいいっぱいだった。

中庭が遠くからでも確認できるくらいまで差し掛かったとき、足を止める。

「一旦、休憩するか……」

近くにあったベンチに向かうと腰を下ろす。空を見上げ、ため息のような息を吐いた。

春野は大丈夫だろうか。あの少女と上手くやっていってるだろうか。

そもそも、体調は良くなったのか？

心配のしすぎかもな。

もっとこんな心配性でもなかったはずなんだが……。

何故か春野のこととなると不安になってくる。

大丈夫だろうか……って。

べ、別に春野ばかり気にすることでもないだろう、俺！ 今は自分のことを考えていれば……。

立ち上がるうとしたとき、頭痛に伴った痛みとめまいが走った。

その瞬間、意識が別の方へと向けられた。

睦月の目には映像の一種が映りこむ。

激怒し何かを見おろす、宙に浮いた少女。

少女が見おろす先に春野弥生が、少女を見上げる。

少女が弥生に魔法で襲い掛かろうとする。

だが、映像は途切れ、元の現実へとひきはなされてしまう。  
未来視か。

だが、あの未来視は一体……。  
未来視に映る映像は今起きている出来事か、これから起こるであろう出来事。どれも必然的に起こる。となると、あれは……これから起こる出来事なのか!?

映像に映った少女は、さきほど春野が看病していたあの少女だろう。

となれば、少女が春野に襲い掛かろうとしたあのシーンは……。

まさかっ！

一滴の冷や汗が流れた。

まずい……まずいことになってしまっ。このままじゃ、春野が…

…。

急がなくては！

未来視の映像は絶対は見たら必ずおきるのが鉄則。

あのシーンも起こる出来事の一つだ。

睦月の体が自然と中庭の方へと引き寄せられていく。足を動かさず中庭に直行。

もう未来視の力には頼らない。

運命は自分で変えられる。

そう信じてきたのに、未来視には勝てなかった。  
シャルロットと相棒を組んだときも。

もし、自分が春野のそばを離れたせいであの出来事が起こる羽目になってしまったのだとしたら……。

自分にも当然責任はある。責任は取らなくては。  
目に入り込む背景が一瞬で通り過ぎていく。

一歩すすめば中庭に入るといふ場所で足が止まった。  
昼食時の時間で中庭は誰もいないはず。  
だが。

何かがぶつかったり、燃えるような音が耳に留まる。  
まずい。

もうすでに始まってしまったか。

「遅かったか……………」

舌打ちして足を中庭に踏み入れた。奥へと進むと中庭には見覚えのある二人。

夏休みの宿題を終わらせるために睦月らを呼び出した春野弥生。

少女が倒れていた近くの木のそばで座っている。

春野弥生が倒れたと言ってきた熱中症ぎみの少女。宙に浮いて弥生を見おろしている。

やばい。未来の映像の通りだ。確かこの後は…………。

弥生が立ち上がったとき、バスケットボールほどの球体を生み出す少女。

おもわず、はっと息を呑む睦月。

その球体は漆黑に似たどす黒い色をしている。あれはおそらく闇系の魔法。

闇系の魔法が使えるのか…………。

「かなりの実力者のようだな、あの子は」

闇系の魔法は数ある魔法の中でもっとも扱いが難しく、コントロールがしにくい。しかも、闇系の魔法は失敗すればそれ相応の代償がつく。二、三回失敗しただけで身体はぼろぼろの状態に成り果てる。かなりの実力がなければ使いこなせない。

だが、体力の消費が少なく、攻撃力も高い。成功すれば相手を追い込める。

少女がさきほどの球体を弥生にぶつける。

「春……………」

二人に聞こえるかと思いい、口ごもる。

弥生がふらつきながら球体を間一髪よけると動きが止まる。体力が減ってきているよう。

少女はちいと舌打ちをしたようだ。どうやら苛立っているらしい。春野より相手の少女が技術的に上だな。

「まずいな……」

睦月は首をかしげてうなる。

もし予想があっていたら、春野はさきほど、あの少女に自分の魔力を分け与えていたはず。闇系の魔法は魔力が多いほど威力が増していく。

だとすれば、今の弥生の魔力は普段の半分しかないはず。春野の魔法は主に水系だ。水系より闇系のほうが勝っている。

「今の状況だったら、あの少女が勝つかもしれんな……」  
大丈夫だろうか。体力切れで倒れたりしないだろうか？  
少しばかり手助けするか。

目に見えるものだとすぐにはれてしまう。

あれがいいな。あれならなんとかいける！

弥生と少女は互いに戦闘に夢中になっている最中。二人の攻防戦が耳に入ってくる。

睦月は二人に見つからないようこっそりと移動した。

\*

図書館の中庭では、十二時二十分になろうとしていた。

弥生は息荒くして四つんばいになっていた。首が痛み顔を上げる事ができない。さんと輝く太陽が弥生の肌を照らし、汗を噴出させる。全身、汗でぬれている。

もう攻防戦は十分経過。攻撃され、攻撃をよけるの繰り返し。そのため、無駄に反射神経と足を使い、体力が無くなりかけている。

もう……そろそろ、体が限界に来ている。

体が鉛で固めたような重量感が強くなっていく。

少女が息絶え絶えの弥生に対し、見おろしながら鼻で笑った。

「もう限界に近いんじゃない？ 闇の魔法は強力で当たれば体力を一気に奪うほどのもの。あきらめて別の方法とつたらどお？」

ただよけているわけではない。もちろん全く当たってないともいわない。何度も闇の魔法をじかに体で受け止めているためか、思うようにいかない。

「ま、まだ……そんなこと……は」

弥生は少女を見上げつぶやいた。

まだ始まったばかりなのに。十分しか経ってないのに。

まだ負けるわけには……。

弥生が見上げたとき、少女がテニスボールほどの黒い物体を無数生み出す様を目にする。少女の周りにはその物体が囲うように飛んでいた。黒い光をもった蛍みみたいだ。

あれはさつき受けたものとは威力は小さそう。だが体のいたるところに当たれば、体力が無くなるのは間違いない。最小限におさえなくては。

少女は獣のような眼光で弥生を見おろす。

「さあ、これで最後にしましょ。大丈夫。死ぬときは楽に死なせてあげるから」

口元が妖艶つぼく笑う。少女そのものが獣みたいだ。

「私の大切なチェリーお姉様を殺した奴は生きてる資格なんかないもの。最後にこれくらいはさせてよね」

チェリーお姉様？ どこかで聞いたような名前……。

っていうか、何故私が殺されないといけないの？ 私は人なんか殺した事ないし、これから先も犯罪を犯す気はないのに。

私が殺される理由……なにか、あるはずなのに……。

目の前の黒い蛍に圧倒され、脳内は白紙。何も思い浮かぶことがない。

どうしよう……このままじゃ、私死んじやう！

でも、何も思い浮かぶことがないし……かといってこのままにしておくと自分の身があぶない。

「さて……………もう思い残す事はないかしら？ 言い残していることは？ 最後の望みとして聞くけれど」

「じゃっ……………じゃあ、ひ、一つだけ！」

人差し指を立て突き出すと、いままで抱いていた疑問を少女にぶつけた。

「私がああなたのお姉さんを殺したって言うてるけど、どうしてそう思ったの？」

「どうして…………？」

少女の眉がかすかに動いた。

弥生は話を続ける。

「理由がどうしてもわからないの！ あなたに殺される理由が！」

「ふっ……………ふざけたことを！」

少女の顔が鬼のような形相に一変する。顔からは前にも増して、殺気が強まる。

少女は鬼のような殺気で弥生をにらみつけた。

「よくそんなことが言えるわね！ あの日、あんたがチェリーお姉様と戦っていたということは、既にこっちの耳に入っているのよ！」

チェリー……………あの日の戦い……………。

まさか！

「チェリーお姉様って……………あのチェリー・ムーンの事？」

「やっと、思い出してくれたみたいね。最後の最後でうれしいわ」  
少女が微笑したのを確認すると、もう一つ質問を試みる。

「じゃ、じゃあ、あなたはあのチェリーとどういう……………」  
だが。

「今はそんなの、どうだっていいじゃない！」

全部言う前に、少女に怒鳴られてしまう。怒らせてしまったようだ。

中庭には早くも昼食を終えた人たちが少しずつ戻ってきている。先ほどまで晴れていた空は急変。灰色がかった雨雲が太陽や空を覆っていく。

まずい……まずいよ。この状況。

あの子はすでに質問できる状況ではなくなっているし、空は雨が降りそうな天気だし。

「あんただけは……あんただけは絶対許さない！ 消えてなくなればいい！」

指を立て弥生を刺すと、一斉に黒い蛍が弥生めがけて急突進。黒い蛍の周りには隕石のごとく、青白い光が黒い蛍を包み込んだ。

やばい！ いっぱいやってきた！

さっきまでの攻撃とは打って変わり、威力もスピードも増している。

ど、どうしよう……。せ、せめてよけることができれば。

弥生は重く感じる脚を動かし立ち上がる。

深いため息をついて目と鼻の先にある、近くの木まで歩き出す。

たどり着く前に黒い蛍が弥生のふくらはぎや、肩甲骨などいたるところに直撃。

弥生はその場にうつぶせになって倒れる。

闇系の魔法は直撃すれば、内から体力や魔力を吸い取っていく。たとえばいさなものでも無数に集まれば、それは大きな力となる。

弥生にとってはおおきなダメージとなってしまった。

もうよけたりすることは出来なくなつた。他の方法を考えないといけない。

他の、他の方法……。他の……。

そうだ！ 歯には歯を、魔法には魔法で！

でも……魔力が……。

弥生はためらいつつも、体を起き上がらせ、後ろを振り返った。少女がすでに次の攻撃の準備を目撃。

手を重ねてクロスさせ、構えをとる。

「アクアシールド！」

水のドームが弥生周辺を覆い尽くす。

弥生の魔法に気づいたのか、少女が声をあげる。

「あら。魔法に変えたのね。まあ、正しい方法といえばそうね」

「……………」

弥生は何も答えない。

「まあ、いいわ。答えなくても。私には関係ない話だもの」

左手の甲を胸の上にかざすように向けた。何かを構える感じにもみえた。まさかまた攻撃してくるんじゃないか……？それはそれでまじい。

今はアクアシールドで張っているとはいえ、安心できるとはいえない。アクアシールドはかなり不安定なもので、ゆれては消えかけを繰り返す。

相手の魔法の威力はかなり強力だ。一回攻撃受けると消えてしまいきそうだ。

弥生が不安に思っていると案の定。

少女が呪文を唱えるかのような小言でつぶやいた。離れすぎているため、口の動きしかわからない。何を言ったのだろうか。

黒い蛍の今度は黒い矢だ。黒い矢は細胞分裂のごとく増え続け、さっきの黒い蛍と変わらない量だ。しかし、大量にありすぎてどれほどのものか目に見える範囲ではわからない。

黒い矢が黒い蛍と同じく一斉攻撃してきた。矢はアクアシールドに飲み込まれていくが、アクアシールドの方は波紋が多く発生している。今にでも壊れそうさ。

お願い……もう少しだけ待って。

弥生はアクアシールドで防御しつつ、魔力で維持を続ける。

だが黒い矢がやむ事はない。増えるたびに襲い掛かり、アクアシールドに直撃していく。

どうしよう。これ以上は持たないかも…………。

歯を食いしばり、限界まで魔力を送り続けてく。

雨のように降り注ぐ矢。魔力で維持を続けるアクアシールド。少女はそんな弥生を面白そうに見下している。だが、ついに。

アクアシールドがはじけとび、消え去った。

やばい！

弥生は生唾を飲み込み、後ずさりする。

ど、どどどど、どうしよう！

周りを見渡し、どこか隠れそうな場所を探す。

弥生が探しているとき、ぽつりと冷たい水が弥生の頭上に落ちた。雨だ。

雨は次第に強くなり、やりのような強い雨へと変わっていく。まるで心につきさしていくようだ。痛いはずなのに痛くない。どこか複雑な気分である。

早く、いい方法を……別の方法を……。

少女がとどめといわんばかりに、右腕を上に掲げ、最大級ともよべる球体を作り出そうしていた。

「せっかく、防いでいたのに残念ね。魔法が途切れちゃって……」

勝ち誇った笑みを浮かべる。

「でも、これで本当に最後よ」

弥生は反射的に構える。だが、魔力が送られてこない。

どうして？

はっと何かを思い出し、汗をたらした。

そうだ！ あの時、あの子が倒れて私が看病してるとき……自分の魔力を与えていたんだった！

熱中症なんだから、魔力を渡す必要なんてなかったはずなのに。何かを引き寄せられるかのように、気づいたらあの子に魔力を渡していた。

本当にどうすれば……いい方法を考えなきゃ、私がやられてしま  
う！

体が震えるばかりで頭が働かない。

右足を一步後ろに下げたとき、雨でぬれた芝生にすべりしりもちをついてしまう。

「……っ！」

お尻をさすりながら、危機を覚える。

少女はそこを見逃しはしなかった。

「まぬけな最後ね。でも、私はあんたを見逃したりはしないわ」  
上げていた右腕をゆっくりと下ろしていく。

まずい……このままじゃ、今度こそ、私死んじやう！

しかし、弥生の体は石像のように固まり、動けない。

いや、動くことが出来なくなっていた。

怖い……死ぬのは怖い。でも、それよりも……。

少女は弥生につぶやくように言った。

「今日は楽しかったわ。あなたとこんなバトルが出来て」

もう、二度と。

「私があなたに負けるわけがないけれど」

睦月さんに。

「さよなら。春野弥生」

会えなくなる事が、一番怖い。

「死ね！」

大声で一喝すると、右腕を思い切り振り下ろす。

球体はバスケットボールよりも倍以上もある凶体。そんな事もかんじさせないほどのスピードで弥生に襲い掛かる。

弥生は反射的に目をつむり死を覚悟した。

その時だった。

「ファイアシールド！」

聞き覚えのある少年の声が中庭中に響き渡る。

弥生の前に球体と同じ大きさであろうほどの、巨大な炎の盾が姿を見せた。

球体は炎の盾に直撃し、みるみるくずれていく。

すごい……。

弥生はつばを呑み、呆然とする。

そんな弥生にかけよってくる一人の少年。

「春野！ 春野、大丈夫か！」

「む、睦月……さん」

「春野、しっかりしろ！」

「よかった……来てくれるって信じてた……」

睦月を見て安心したのか、急にまぶたが重くのしかかる。

「助けて……くれて、ありが……とう、睦月さ……」

弥生は一瞬にして睡魔に襲われ、そのまま眠り始めた。

その後、夕方まで目を覚ます事はなかった。

## 弥生と転校生の学校初日

時刻は七時半。

次の日になり、今日から二学期が始まった。海堂町にあるもつとも有名な海堂市立海堂中学校。水泳で全国大会優勝するほどの強豪校でもある。

弥生は海堂中学校指定の通学路を通りながら学校へと向かった。

弥生の両側には一軒家が規則正しく立ち並んで出迎え、その前には電柱のように等間隔に植えられたソメイヨシノ。春になると桜が満開になり、道を桜のはなびらが舞う。今は葉っぱが茶色に染まり、枯れ葉に姿を変えていた。一部の桜はすでに枯れ葉が地面に落ち始める。もう、秋に近づいてきているなと感じる。

そして、今日から学校がまた始まる。クラスのみんなに会える。授業も始まる。そう考えると心が躍る。笑みがこぼれずにはいられないのだ。学校に行くだけで、みんなのクラスの顔を見かけただけで、

私は一人じゃない。

と、思っていていられる。そう、言っていたほうが安心するのだ。一人暮らしの私には。

だが、全部が全部うれしい出来事だとは限らない。

それは「昨日の事」である。

昨日、あの戦いで倒れた時間から目を覚ます夕方までの間がわからない。あのあとどうなったかさえも私にはわからずじまい。

あのあと、あの少女と戦っていたということも覚えてはいる。睦月さんが駆けつけてくれて安心したら、そのまま気を失ってしまった。

睦月さんはあのあと、どうなったんだろう？ やり過ごしてくれただろうか？

あの子もあれからどうしているんだろう？　まだ怒っていたりするのだろうか？

何があったか知りたい。でも、知ったところで何になるんだろう。何かを得るわけじゃないのに。

それでもやっぱり、真実が知りたいという思いが私の中で強い。でも、思い出そうとしても思い出せない。どうしても。思い出せば何かあるかもしれないのに。

けれども、頭の中にもやががかかって、よくわからない。どうすればいいかわからない。

海堂中学校の校門が目と鼻の先にさしかかったとき、足を止める。海堂中学校のプレートが目に入ってきた。校門には制服を着た男女の生徒らが無表情で校門を通って校舎へと向かっていく。その表情はまるで人形のようにだった。

弥生の額に一滴の雫が噴出し、滴り落ちる。

誰かに相談して、聞いてみるべき？　でも誰に相談するの？

あの子がどこの誰かなんてわからないし、睦月さんの家なんて知らないし。もちろん、睦月さんの携帯番号は知ってるが、今は学校がある。かけられるはずがない。

憂鬱のようなため息を漏らした。

葉月は知らないからな。あの戦いのこと。

あの場にいたのは、あの子と睦月さんと私だけ。葉月は私が倒れるまでいなかったから知らないはず。だが、倒れたあとのことの問題だ。私が倒れてすぐに戻ってきたのかかもしれないし、あの子が去ったあとに職員さんを連れてきたのかかもしれないし。そこは本人に聞いてみないとわからない。断定はしていけない。

でも。

下を向いたときだった。弥生の右肩に手が乗り声をかけられた。

「弥生っ。何してるの？」

弥生が振り返ると、小麦色の肌にくたく切った黒髪の少女が立っている。

「臯月っ？」

弥生と同じ3年1組のクラスメイト、夏野臯月である。女子陸上部に所属し、陸上部のエースを務める元気で運動神経抜群の女の子なのだ。

「弥生、なんかしけた顔してない？」

「し、しけた顔？」

「そ。何があつたか知らないけど、元気だしなよね。弥生は一人じゃないんだからさ」

「臯月……」

弥生は臯月の言葉に目を潤ませる。

臯月が思い出したかのように、手をたたく。

「あつ。そういえばさ、弥生。今日うちのクラスに転校生がやってくるみたいよ」

「転校生？ こんな時期に？」

「そう。しかも、転校生は二人くるらしいの」

臯月の言葉を耳にして、

「二人もっ？」

と、驚きの声をあげた弥生。

「そうなのよ。変だと思わない？ こんな季節に転校生二人って「確かに」

「しかも、二人ともうちのクラスに来るのよ？ おかしいでしょ」  
臯月の顔はどこか腑に落ちなさそうな顔だ。納得がいていないようである。

「それに、一人は超のつく天才頭脳の持ち主だっていうじゃない？  
不公平よ！ 私なんか、部活づけで勉強できていないというのに！」

弥生は癪癢を起こす臯月を目の前に口を開けたまま呆然とする。

「ま、まあ、そうだね……」

「ははっ、と顔を引きつらせた。」

「で、でも、その子に勉強少しくらい勉強教えてもらうとかなんて

「……やっぱやめとく」

「それよ！」

「へっ？」

弥生が皐月の声にびくつと肩をすばませる。

皐月は目を輝かせ、天を仰ぎ見た。

「そうよ！ 別にライバル視しなくてもいいのよ！ そう！ 利用できるものは利用しなきゃ！」

まともなこと言ってるようで、馬鹿なこと言っているのか、自分にはさっぱりわからない。

「そうと決まれば、第一印象をよくするために、練習よ！」

「練習……？ 何の？」

弥生の質問に皐月は、

「もちろん、その転校生と仲良くなるためのシミュレーションよ！ 第一印象がよければ後々楽じゃない！」

自信満々に答えた。

「ら、楽って……」

なんだか、公園で遊ぶ子供みたいだ。そんなに大丈夫だろうか。

皐月がじゃあ、と切り出し、

「ということで、教室で自己紹介の練習してくるわ！」

目を星屑のごとく、輝いている。

皐月は元気だなー。どうしたら、皐月のように元気で明るい子になれるのかなあ。

「うん、わかった。がんばってね」

弥生の顔はごまかし笑いをうかべていた。

そ、そんなんで大丈夫かなあ……。

走り去っていく皐月に手を振りながら、見送る。

皐月の姿が見えなくなると、ゆっくりとした足取りで教室に向かう。

3年1組 教室前

久しぶりの学校に胸を躍らせていたが、いざというとなると緊張が高ぶってしまふ。

……落ち着け！ 私！

ぐつと息を呑み、教室の入り口に手を伸ばす。入り口を勢いよく開け、一言。

「おはよ！」

教室にいた生徒が一斉に弥生に集中した。

そして口々に声を出す。

「あ、弥生だ！」

「おひさー、弥生っ」

「久しぶりじゃん」

どれも暖かい声。全身がほっとした感覚になる。

「うん、みんなおはよ」

入り口を閉めると、弥生は自分の席に向かう。

弥生が通り過ぎた時入り口近くの席で、三人組の男子生徒の話し声が入った。

「やっぱり春野はかわいいよな」

「ああ、秋村もいいが、あいつは性格が駄目だからなあ」

「そうそう。ちよつと話しただけで嫉妬したりするし。ほんと嫉妬深いよな」

葉月の噂話のようだ。葉月ってそんなに嫉妬深い子だったかな。

首をかしげていると、さきほど会った皐月がまた声をかけてきた。

「弥生、ちよつと来な」

来る様子招きしてくる。なにか話があるらしい。

方向を変えていってみると、唐突に話を切り出される。

「弥生、これ以上葉月と関わっちゃ駄目よ」

「ええ？ 何の話？ 一体」

「弥生、あなたは葉月を大切な親友とか思っているだろうけどさ」「うん。思ってるよ。それがどうかした？」

弥生は悪びれる様子もなく肯定する弥生に、皐月は困り果てた顔でため息をつく。

「弥生……単刀直入に言うわ。葉月はね、好きな男の子と他の女子が少しでも関わりると嫉妬する子なのよ」「

「それがどうかした？」

「あんた、一学期の時、夏野君とお話してなかった？」

「うん。したよ。それで？」

うなづいたあと聞き返してくる弥生に、皐月が口を開ける。

「それでって……私が話したの忘れたの？」

「ううん、覚えてる。葉月は嫉妬深いつて話でしょ？」

「そうだけど……」

「話の内容はよくわからないけど……、私、葉月を信じてるから弥生の目には自信が満ち溢れていた。もう誰にも止められないと言っているかのように。」

「弥生……。わかった！ 弥生がそこまで言うならもう止めないわ

！もし、葉月に何かあつたら真っ先に私に言うのよ？ いい？」

「うん、わかった」

弥生は力強くうなづいた。

皐月も笑顔でうなづき返す。

「なら行ってよし」

弥生は皐月の笑顔を目に焼き付けると、自分の席に着く。

席に着いたときに、横から葉月の声が耳に入る。

「弥生、皐月と何を話していたの？」

葉月の声に思わずビクツと反応してしまう。

さつき、皐月に葉月のことを聞いたばかりなので妙に気まずい。

「えっ。な、何が？」

明らかに動揺しているというのがばれればれた。

「そういう反応するのって、私に話せないことなの？」

「えっと、そういうワケじゃあ……」

冷や汗が一気に吹き出てくる。

「な、なんて言えばいいのかな……。あ、あれよ！ あれなの！」  
「あれって何よー。『あれ』って」

頬を膨らませ、眉をひそめる葉月。明らかに怪しまれている。

どうしようと思ったが、葉月が言う。

「ま、あの皐月のことだから、どうせしょーもない話だろうから気にしていないけど」

葉月と皐月は性格が似ているようで正反対なのである。直に会話したくないほどで、第三者を通してでないと話さない。何故、仲が悪いのか知らないが、どうやら二人に共通する好きな人のことで何か問題が起きたらしい。それ以来、二人は直に会話していない。

「そうそう！ 弥生、転校生の話、聞いたっ？」

「うん、皐月から聞いたよ」

葉月は弥生の口からまたもや皐月という言葉を聞いて、さらに不機嫌そうな顔をつのらせる。

「何よ。また、皐月？ ま、いいわ。転校生は二人。しかも、

一人は女子で、もう一人は……。男子だっつて！」

「男の子と女の子の転校生がくるの？」

「男の子って……。その言い方じゃ、まるで小学生ね。で、噂では、二人はカップルじゃないかっていう噂よ！ まあ、さすがにみんな信じ切っていないみたいだけど。みんな転校生の男の子に興味津津の様だし」

「へえー。そうなんだ」

弥生は興味がなさそうな声で相槌を打つ。

好きな人は睦月しかないないので、そんなの聞いても興味がないのである。だが、男にルーズの皐月があれだけテンションが高かったのは、転校生に男の子が来るからか。

「でも、ほんと不思議だね。こんな時期に転校生って」

「まあね。実はもう一つ噂があつて、二人とも何かの目的があつて

この学校に来るんじゃないかって噂してるわ。春先ならともかく、秋に近づくこの時期に転校してくるなんて変だってみんなささやいてる」

葉月がやれやれと言った顔で、横に首を振った。

転校生か……。

一人は男の子で、もう一人は女の子。女の子だったらお友達になれるかも？ あと、その転校生の男の子っていうのが、もし、睦月さんだったら……。

我知らず頬を赤らめる弥生。

そうだ。

皐月の『転校生と仲良くするためのシミュレーション』はどうなつたのかなあ……。

自分の席から離れた窓を横目で眺める弥生だった。

\*

時間を戻して七時半。

海堂中学校にある校長室。来客用のソファーに一人の少女が座っていた。

スリジエ・ムーンである。

左壁の奥のドアは隣の職員室につながっている。だがスリジエが知るはずがない。

これが人間の学校なのか。

本などでみたことのあるいたって普通の校長室。どこにも不自然なところはない。

だが、そんなことはどうだっていい。

人間の町に来て初めての学校。緊張しないわけがない。しかし、ここで食い下がるといままでの努力が水の泡になってしまう。学校

に入るのにどれだけ苦労したことが。

「おまたせしました」

職員室に通じるドアから入ってきた、灰色のスーツの男。豪邸で執事をやっていそうながつちりとした体格。白髪交じりの黒髪をオールバックにし、お洒落に刈り込んだ口髭を生やしている。この学校の校長である。

「すみません。職員会議が早まってしまっただけ。いろいろ問題が起きて時間がかかってしまいました」

校長はそう言うと、スリジエの向かいのソファに座った。

「いえ……。別に気にしてはいませんので」

落ち着いた控えめの口調のスリジエ。あまり人間と深く関わったことのない、人魚のスリジエにとって何もかもがはじめての出来事なのだ。人間の町にある学校の校長先生に会うことも。

ふと思った。昨日は海堂町の伝説について図書館に行ったが、春野弥生に会っていたので結局調べなかった。しかも、昨日のこと、あの少女が春野弥生だと知ってからの事が覚えていない。自分のことなのに自分がわからないなんて。

そうだ。この校長なら、海堂町の伝説について何か知ってるかも知れない。この海堂町に住む人たちにとって、海堂町の伝説は当たり前のように教え伝えられるものらしい。だとすれば、何か情報もらえるかもしれない。

スリジエは思い切って校長に声をかけてみた。

「あ、あのっ……………」

「ん？」

スリジエの後ろの壁にある壁掛け時計を見上げていた校長が視線をスリジエに移す。

「どうかなさいましたか？」

スリジエは校長が自分に視線を向けたの確認すると、話を切り出す。

「あの、この海堂町の伝説についてお聞きしたいのですがっ！」

「海堂町の伝説？ …… ああ、あれですね」

最初は戸惑っていた校長だが、すぐにスリジエの言ってる意味を理解したようだ。やはり、この海堂町の人間は海堂町の伝説は当たり前前に知ってるものなのだと、改めて感心する。

「で、何について知りたいですか？」

と校長に尋ねられ、真っ先に口にする。

「ほ、滅んだ人魚の国についてです！」

まずは仇の過去から知っておけば、後々役に立つと考えたからなるほど……。実は滅んだ理由は諸説あるんですが、もっとも有力とされているのが、海の魔物が襲ったという説ですな」

「海の魔物……？」

「さよう。海の魔物は二匹おるとされ、北にベビモス、南にリヴァイアサンという恐ろしい魔物がすんでいるとされています。まあ、もう数百年も経ちますから実際のところは謎ですが」

リヴァイアサン！ スリジエは知っている。その名前のこと。そして、最近チェリーお姉様の手によって一度封印が解かれたことも北の海にも南の海に対等する魔物はいると聞いてはいたが……。

「滅んだ人魚の国は当時、王女の成人式を行っていたらしく、その最中に魔物が侵入し、そのままほろんだとされています」

「それで、その王女様はどうなっただんですか？」

「それが……いまだに見つかっておらず、国王が夢の宝玉を持たせて逃がしたのではないかと学者たちは考えているようですが」

いまだ見つかっていない！

スリジエは校長の話聞いて確信を持つ。

間違いない！ その王女は春野弥生の前世。そりゃあ、いないのも当然。本人は王女の姿を捨て、新しい姿に生まれ変わっているのだから。

もつとなにか詳しい話が聞けるかもしれない。

スリジエが口を開けようとした時、廊下につながるドアから二人の男が入ってきた。

一人の長身の男がつぶやく。

「失礼します。すみません、校長先生。話しているところ悪いんですが、もう一人の編入生を連れてきました」

もう一人の少年は校長に会釈し、挨拶する。

「失礼します。校長先生、おはようございます」

一人は一七〇センチほどの教師らしき男。もう一人はスリジエとほぼ変わらない、一六〇センチほどの少年。この学校の制服を着ていることから、この学校の生徒だろうか。スリジエと同じ年にも見える。

なんだか、この者達に話を遮られたような気がする。

内心の苛立ちを隠しつつ、少年の顔を凝視してみた。

どこかで見たとのことのある顔だ。どこだっただろうか。最近会ったような気が……。

そこで、昨日春野弥生といた一人の少年を思い出す。

そうだ！ 昨日、飲み物をくれたあの男の子だわ！ 好みの顔した男の子！ こげ茶色の髪が鮮明に脳に刻み込まれていた。まさかこんなところで会えるなんて……！

スリジエが少年との出会いに胸を躍らせている中、校長が少年に一声かける。

「冬川睦月君……だったかね？ この町は初めて来たというが、そんなことを感じさせないようなオーラをもってる。やっぱりこの町に歓迎されているんだねえ」

校長の言葉で少年の名前が『冬川睦月』だと判明した。冬川睦月君、睦月はなれなれしいから冬川君かしら？

睦月は斜め下に視線を逸らす。

「いえ、そんなことはありません。今は校長先生に挨拶に来ただけですから」

「最初会ったときも思ったが、君はクールだね。だからあんなに人気になるのかね？」

「そう、なんですか……？」

睦月の顔がどことなく怪訝そうにする。

「まあ、とにかく、君はこの学校に入って正解だという事だよ。ああ、そうだ」

スリジエはちょっと来てくれんか？　といわんばかりの校長の手招きを受ける。表情は穏やかだ。

スリジエはひらめく。これは冬川君にもっと自分をアピールできるチャンスではなからうか。しかも、校長が紹介してくれるというなんというグットタイミング！　これは絶対モノにしなくては！

「はい。何でしょうか？」

あまり興奮しているのがばれるとまずいので、いたって何も無かったように対応する。

校長は睦月にスリジエを紹介し始めた。

「このこはスリジエ・ムーンちゃん。君と同じ三年一組のクラスに入る子だよ」

睦月は少し間を置いてから、

「……………よろしく」

小声でつぶやいた。スリジエがギリギリ耳に入ってくるような声。初めて会ったわけではないと向こうも気づいてくれているらしい。

「こちらこそよろしくね。冬川君」

スリジエは握手を求めるが、睦月は握手に応じようとはしない。

やはり、まだ無理か。

男性教師が左手にはめている腕時計で時間を確認する。腕時計は本で知ってはいるがみた事なかったため、今初めてみる。あれが腕時計というものか。

「校長先生、そろそろ体育館で始業式が始まる頃ですね」

「そういえばそうじゃのう……。では、荒川先生、この二人を頼みましたぞ」

荒川先生と呼ばれた教師はスリジエと睦月に一声かけた。

「はい、わかりました。じゃあ二人とも行こうか」

「はい」

睦月は何も無かったかのように前を歩きだす。

「あ、は、はい」

スリジエも荒川先生と睦月においていられないよう、後をついていった。

これから、私の新しい学校生活が始まるのね！

その表情は自信に満ちた笑顔であふれていたのだった。

\*

体育館で始業式が終わった十時頃、生徒達は各自教室へと戻っていく。弥生もまた自分の教室に戻り、自分の席でホームルームが始まるのを待っていた。ただ待っているわけではない。わずかな時間でも昨日の事を思い出せるんじゃないかと考えたからだ。ただ何もせずに終わらせると歯切れが悪いからだ。昨日何があったか知った上で、頭をすっきりさせ、授業に望みたい。

けれど何度試みても上手くいかない。やはり記憶にもやがかかる。なにか、なにか手がかりがあれば……。

両手で頭を押さえていたのが、ゆっくりと離される。

そうだ！

睦月さんが駆けつけてくれたとき、もう一人誰かが駆けつけた。

私を知ってる人。すぐ近くにいる人。でもわかっているはずなのにわからない。

た、確か……。

駆けつけた人物の顔が判明しそうになったときだった。

「弥生。あんた、何してるのよ」

声の主は秋村葉月だった。葉月は首をかしげて不思議そうにしている。

「えっ。いや、ちょっと考え事をね……」

弥生はそう答えて見せた。表情は難しい顔のまま。

「昨日中庭で葉月を待っていたら途中で倒れちゃって。それからの事が思い出せそうで思い出せなくて……」

「って、あの女の子の次はあんたが倒れちゃったの？ 馬鹿じゃない！ 何をやってたの、あんたは」

「うう……。ごめんなさい……」

小さくうずくまり反省すると、気まずそうに顔を上げた。

「で、でも、でも。睦月さんが家まで送ってくれたみたいだし……」  
「それ、理由になってないわよ」

「そ、それであるの、葉月は職員呼びに行っていたの、あれどうなったの？」

弥生が質問したとき、葉月が能面のようにこわばり表情を一変させた。

「何の話？」

「何の話って、葉月も昨日一緒に図書館に行ってくれたじゃん」  
「さあ？ なぐんの、ことかしら？ 私は知りません」

何もなかったかのようにしゃべる葉月に違和感を感じてならなかった。どうして、そこまで「事実」を無かったことにしようとするのだろう。別に無かったことにする必要はないはずなのに。

聞こうとは思ったが、担任の荒川先生が入ってきたため、言えずじまいになった。

荒川先生は教卓まで歩き、出席簿をその教卓に置くと、転校生の話を始める。

「ホームルームをはじめる前に、みんなも知ってると思うが、転校生を紹介する」

その瞬間、教室内はざわめいた。やっぱりきたか！ そんな雰囲気気を思わせるかのよううだ。

クラスの生徒らが噂し始める。

「転校生って男女二人だよな？ やっぱり恋人ってことないかな？」  
「ないでしょ。二人とも初対面って先生たちが言ってたし」

「転校生の女の子、かわいいかなあ」

「相当の美少女だって。うわさじゃあ、春野と同じくらいかわいいつてよ！」

「しかも、転校生の男の子もイケメンだって！」

「うそお〜！マジ？」

転校生の男女二人の関係を怪しむ者。転校生の容姿を気にする者。誰もが転校生の話でもちきりだ。誰も転校生の二人に興味がないはずがない。

弥生も当然、転校生の二人は気にはなるが、先生が転校生を紹介しない限り何も始まらないので少々退屈気味なのだ。

「静かに！話を戻すぞ！」

先生の声が届いたのか、教室が静かになる。誰も私語をしなくなつた。

先生がその転校生を紹介するのがわかつたからだ。

転校生か。

「転校生は二人いる。まずは一人目の転校生だ。睦月君、入ってきてなさい」

睦月……君？

先生の話に聞き覚えのある言葉が入っていた。

先生が入り口に視線を向ける。教室内の生徒も全員、前の入り口に集中した。

がらりと戸が開き、一人の少年の姿があつた。

少年を入り口を閉めると荒川先生の左隣で止まった。

少年が正面を向いたとき、弥生が知っている顔がそこにはある。

「冬川睦月です。よろしくおねがいします」

睦月は浅く会釈をする。男子らは不愉快そうに見つめ、女子達は睦月の容姿に頬を赤らめ見とれていた。

そう、弥生が会いたいと思っていた睦月である。

ま、まさか転校生の一人が睦月さんだっただなんて……！  
笑みがこぼれそうになる。

睦月も教室内に弥生がいることにきがついたのか、弥生は睦月と目が合う。

顔から火が出そうになった。恥ずかしいというより、睦月と目があつて心臓が高鳴ってしまったのだ。

でも、これからは少しでも睦月さんと一緒にいられる時間が長くなる……。

先生が話を続けた。

「次行くぞー！ 二人目の転校生だ。スリジエさん、入ってきたなさい」

今度は聞いたことのない名前だ。誰だろう。もう一人は女の子のはず。

睦月が入ってきた入り口から、藤色の髪した少女が入ってくる。腰まである長い髪が歩くたびに左右揺れる。揺れる髪に反応するかのように、豊かに膨らんだ胸も上下に小さく動く。

あ、あの子は……。

弥生は息を呑む。

少女が真正面に向いたとき、心臓が止まるくらいの衝撃が走った。「スリジエ・ムーンといいます。これからよろしくお願いします」スリジエは睦月を真似するかのごとく、会釈する。教室内の反応が入れ替わった。男子らは興奮し興味津々そうに凝視するが、一方の女子達は眉間にしわをよせてにらみつける。

あの子は昨日の子だ！

弥生が見間違えるはずがなかった。昨日、倒れるきっかけとなつたあの少女である。

睦月の転校もあの子の転校も、予想していなかったため、呆然とスリジエを見つめるばかり。

どうしよう……。

弥生はこの先大丈夫なのか先行きが不安でならなかった。

## 弥生と転校生のウワサ話

ホームルームが終わり、三限目のみ授業することとなった三年一組の教室。三年一組だけでなく、全学年授業を受けている。

三年一組の教室では弥生が苦手分類とされる数学が行われていた。黒板で右手に数学の教科書、左手にチョークを持って黒板を説明する中年の女性教師。派手目の赤いスーツが遠くでも目に焼きつく緑の黒板に白のチョークで、黒板いっぱい書かれている数式。青や赤のチョークは、一部重要な部分のみしか使用されていない。弥生にとって黒板に書かれた数式は地獄でしかない。

見ているだけで英語の長文にしか見えないほどの細かさ。弥生の席は後ろの席から二番目で、窓よりの席のためあまり見えにくい。几帳面すぎる。

授業があるのはわかってはいたが、最初の授業が数学というのは辛い。

弥生の視線が黒板から右斜め上の席、前から二番目の廊下よりの席に移る。その席には今日転校してきた睦月の席である。その睦月の後ろは昨日の倒れた少女、スリジエの席。二人とも今日この学校にやってきたばかりの転校生だ。

今の弥生には数学の授業は耳に入っていない。受け付けないのだ。睦月のウワサが頭から離れないために。

葉月から睦月さんのあるウワサを耳した。

噂では、二人はカップルじゃないかっていう噂よ！ まあ、さすがにみんな信じ切っていないみたいだけど。みんな転校生の男の子に興味津々の様だし。

あのスリジエさんと睦月さんが恋人同士……。

噂なので、ホントではないことはわかっている。睦月があのスリジエとあの時が初対面だったことも知っている。

知ってて、わかっているはずなのに……。  
記憶がもやがかったと思えば、今度は心の中がもやがる。なにかすつきりしない。やってもない罪をかぶせられたような気分。

こういつときって、どうしたら……。  
睦月とは特別な関係というわけでもなく、仲の良い友達というわけでもない。

ただ好きだと告白されただけという関係だけ。  
けれど、なにか裏切られたような気分である。

「では、この問題を春野さん。解いてください」  
先生に当てられ、「へっ？」とつぶやき数秒間、間が空く弥生。椅子から立ち上がると、数学の教科書を開いた。

「は、はい。え、え」と……どこだっけ？  
教科書のページをめくりまくる弥生に見かねたのか、葉月が小声で話しかける。

「弥生、馬鹿ね。教科書は一三七ページでしょ！」

「あ、そっか。ありがとう、葉月！」  
葉月に指定されたページを開き、机に教科書を置いた。先生が言っていた問題を人差し指で探す。探していた人差し指が止まる。それは平方根の問題だった。

「あ、これか」  
再び教科書を両手で持ち上げた。

「答えは、……ルート三です」  
「よろしい。座っても良いですよ」  
先生は弥生が答えたのを確認し、目線を黒板に戻す。

答え終えた弥生は着席。ほっと胸を撫で下ろした。  
隣で再び葉月が声をかけてきた。

「ねえ、弥生。転校生の男の子で、もう一つウワサを耳したんだけど聞かない？」

睦月さんとスリジエの恋人だといううわさで頭がいつぱいなのに、これ以上どうしろと言っのたろう。

「噂？　なんでまた今頃……」

「まあまあ。そんなこと言わずに。あの睦月君、実はとある国の王子じゃないかって、噂されてるの。しかも、婚約者がいるんじゃないかって」

「こ、婚約者!？」

勢い良く立ち上がり、その衝撃で椅子が揺れ動く。椅子は大きく揺れ動くだけで、床に倒れず元に戻った。

衝撃に先生やクラスメートが弥生に集中する。

「春野さん、婚約者がどうかしましたか？」

弥生は先生の声で我に返る。回りを見回し、クラスメートが自分に視線を向けている事に気がつく。

「えっ？　あ、いや、あの……… なんでもないです」

やってしまったという顔でしょんぼりと席に着く。

「はあ……… なんでこうなったんだろ」

「弥生って、相変わらず馬鹿ね。もっと静かに話せないの？」

弥生は葉月にしかられますます小さくうづくまる。

睦月の噂が頭に離れないまま、授業が終わり、昼休みに入った。

## 昼休み

「弥生の頭の悪さはどうやってたら直るかしらね」

葉月が広げたお弁当に手をつけながらつぶやいた。お弁当の具は卵焼き、たこさんウインナーなどいたってどこにでもあるようなお弁当に見える。

葉月の箸が卵焼きに向けられ持ち上げられた。そのまま葉月の口に運ばれる。

弥生もお弁当を食べようと、ピンクのバンダナに包まれたお弁当をかばんから取り出す。

バンダナの結び目に手を添えたとき、動きを止めた。

ご飯をほおぼろうとした葉月が、眉間にしわをよせながら放り込む。

「何よ、動きとめちゃって。お弁当食べないの？ それとも噂、気にしてるの？」

「だ、だって……気になって仕方ないんだもん」

弥生は口を尖らせると、ためらいながら結び目を解き始める。

見かねた葉月がある提案を弥生に投げかけた。

「だったら、真相確かめる名目で、ここにつれてくればいいじゃない。そしたら、ついでお弁当食べられし、何かわかるかもしれないじゃない？」

葉月の提案に、無邪気な子供のように顔が輝く。

その手があつたか！

「そうか！ それならいけるかも！ ありがとう！ほんとに、ありがとう！ 葉月って頭良い〜！」

そのはしゃぎようは完全に子供だ。だが、本人は意識していない。噂の審議が確かめられるというだけで、頭に入っていない。

さっそく睦月に声をかけるべく、睦月を探す。しかし。

睦月の席の周りにはクラスの女子で囲まれ、近づく事が困難になっていた。人数は約四、五人といったところか。

スリジエも同様、男子に囲まれ大人気ぶり。スリジエの場合は睦月の倍の数に囲まれている。

睦月をとり囲む女子達は睦月に対し一方的に質問攻めをしていた。

「ねえねえ！ 睦月君って、彼女とかいるの？」

「前の学校はどこにいたの？」

「どんな女の子が好き？ 私なんてどお？」

「ちよっと！ 抜け駆けなんて反対！」

ち、近づけない……！

睦月に聞くとかそれどころではない。むやみに近づいたら女子が「抜け駆け」とか思われて、怒ってきそうだ。

「あの噂が嘘だったらしいのに……」

仕方がなくあきらめて、弁当を食べるしかなかった。

自分の席に戻った弥生は弁当のふたを開け、いただきますと手を合わせる。ゆっくり箸箱に手を伸ばしたときだった。

「春野さん」

弥生が右隣を向いた先にはスリジエがたっていた。その表情は険しい顔をしていた。なにか重要なことでもあるのだろうか。

「春野さん、ちょっと話があるの」

スリジエが顔を弥生の右耳に近づけささやく。

「ここじゃ話せないから、一緒に来てもらえるかしら？」

「話……？」

弁当を食べようとしたときに話しかけられたため、躊躇する。

弥生はスリジエのことも気になっていた事もあったので、急いで弁当をしまう。

「わかった。じゃあ、行こうか」

スリジエにそう返事をする、弁当を夢中に食べる葉月に言い残す。

「ちょっとスリジエさんとお話してくるね」

「……へ？ お弁当はどうするのよー」

「あとで食べるよー！」

弥生はこのあと何が起こるかわからないまま、スリジエのあとを歩いて行った。

## 屋上

弥生とスリジエは無言のまま屋上へとたどり着いた。網フェンス側にスリジエが、屋上のドア側に弥生が立つ。一メートルほど離れて互いに見つめる。二人の間に秋風が吹く。

先に口を開いたのはスリジエだ。

「春野さん、いえ、あんたに聞きたいことがあるの」

「聞きたいこと？」

「そう。あなたがチェリーお姉様と対決した日の事を聞きたいの」

スリジエの目は獣のような鋭い目で弥生を映していた。

「さあ、答えて！」

スリジエの気迫に押されたためらうも、弥生は逆に質問する。

「答えるけど……その前に聞きたい事があるの」

「何？」

スリジエは逆に質問されて怒りを覚える。

「あなたと、チェリー、さんの関係は？ どうして私とチェリーの

対決が知りたいの？ その理由を教えてほしいの」

悩んでばかりじゃ駄目だ。まずは気になったことは本人にぶつ

けてみるのが先決だ。

「お願い！ 理由を知っておかないと、なんか、良い気分じゃない

というか……」

弥生の願いに聞かないという顔で受け流すスリジエ。

それでも駄目で元々で言っているんだ。たとえ無理だとしても話を続けた。

「ちゃんと理由聞いたら、あの日のこと話すから！」

弥生が言った言葉を聞き逃さなかったスリジエが、まぶたをかすかに動かす。

スリジエはようやく言葉を放つ。

「……その言葉に嘘はないでしょうね？」

スリジエが耳を傾けてくれたことに心底うれしさをにじませる。

「うん！ 嘘はないよ！」

弥生は力強くうなづいた。

二人の間に再び秋風が吹く。間に割り込むように。

「ちょっと、生意気すぎた……かな？」

スリジエが何も言っていないので、余計に不安になってくる。

スリジエの顔を覗き込もうとしてみた。

だが、余計怪しまれると思い、覗き込むのをやめる。

ほぼ同時にスリジエは話を始めた。

「私があんたにあの日のことを聞きたい理由……それは！」

獣のような眼光でにらみつけ、指を突き付ける。

「あんたが戦って死んだ、チェリーお姉様の仇をとるためよ！」

「それと、私が何の関係が……」

スリジエは弥生に全部言わせなかった。

「あるわ！ あんたがチェリーお姉様を殺したんでしょ！ そんな、

いい子ぶったって無駄よ！ 私には全部お見通しなんだから！」

「違う！ 私じゃない！ 違うの！」

弥生は大きく横に首を振り、否定する。

彼女は誤解している。あの日、チェリーに何があったのか。

チェリーがどれだけ妹さんを想っていたか。彼女は気づいていない。

全部言えば誤解だって解けるはず。

「あの日、確かに私は戦ってた。睦月さんをたすけるために」

「どうして、冬川君が出てくるのよ？」

「チェリーさんの相棒が、私の宝玉を狙って睦月さんを人質に取っ

たの。シャルロットという男が」

「シャルロットですって!？」

「チェリーさんはそれを私に知らせるべく、わざと自分がやったよ

うに見せて私と自分と戦わせたの。

でも、誰かに狙われていたみたいで、氷の魔法で死んじゃって…

…」

スリジエの両手が握られ拳が出来ていた。二つの拳は振るえ、我慢しているようだった。

スリジエが独り言のようにつぶやく。

「信じない……信じない、絶対信じない！ 私のたった一人のお姉さんであるチェリーお姉様が、あのシャルロットと手を組んでいたなんて、絶対信じない！」

スリジエの言葉に驚愕した。あの、スリジエが、チェリーと実の姉妹？

じゃ、チェリーが言っていた、同じ年の妹さんって、スリジエさなんだっの！？

シャルロットのことを知っていたことよりも、チェリーとスリジエの姉妹関係に混乱していた。

わ、私は……。

どうしたら……。

薄々そうじゃないかと思ってはいたが、ほんとに姉妹だったなんて。

弥生はこの後、一言もしゃべることが出来なかった。

\*

### 三年一組の教室

スリジエと弥生がない教室では、ここぞとばかりに女子が睦月に殺到していた。

睦月も対応に困り果てていた。スリジエと弥生がないせいか、

男子群は暇を感じ始める。中にはふてくされる者もいる。

どうしたらいいのだろうか。

押し寄せる女子の群れ。まるでチーターに狙われるシマウマのようだ。

「ねえねえ！ 私と一緒に学校回らない？」

「いや、私が学校案内してあげる！」

「睦月君は勉強得意？ 私が教えてあげようか？」

「ちょっと！ 一人で抜け駆けは駄目って言うてるでしょーが！」

「押さないでよ！ マジ痛いし！」

女子の中には殴り合いになる女子もいれば、少しでも距離を縮ませようとする者もいる。

これが海堂町の中学校か……。

思っていた以上のところだな。

はあ、とため息を漏らすしかない。

「そういえば、弥生がいないよね？」

一人の女子が話題を変えた事で他の女子達が教室中を見渡し始める。

春野がいないだと？

睦月もその言葉で弥生がいないことを知った。当然だろう。無数の女子に囲まれた状態じゃあ、教室を見ることがすら出来ないのだから。

「あと、スリジエっていう転校生も見当たらないね？ どこ行ったんだろう？」

「さあ？ あの子は別に気にすることないんじゃない？」

「そうよね？ あれだけ男子にモテまくりなんだから、誰か一人はついていつてるだろうし」

「そうそう！ 自分がかわいいからってこび売ってるのよ、きつと！」

スリジエは女子達にはあまり良くは思われていないようだ。

転校生の男子と女子でこれだけ差が出るとは。

再びため息をつく。ため息をつかないでいられようか。

「そういえば、あのスリジエって子、ヒトじゃないんじゃないかってウワサだった！」

「嘘？ほんとに？」

「ほんとに！海の中から出てくるのをみたって言った子がいるし！」

睦月は海の中というフレーズに反応する。海の中？海の中といったら人魚しかいない。

もっと詳しい情報を得るため、耳をそばだてる。

「それに、誰かを探しているみたいだし。なんか誰かを殺そうとする目だったって！」

「そんな子がうちのクラスに来て大丈夫なの？」

「怒ったらすぐ襲い掛かってきそうだし」

女子達の話聞いて、睦月の額に汗が落ちた。

「まずい！春野が危ない！」

誰かを探しているというのはおそらく春野のことだろう。あのスリジエっていう少女、どこか作られたような身体をしていた。もし、ウワサが本当だったとすれば……。

スリジエが春野を呼び出したに違いない！

春野！

睦月は女子に囲まれたまま、身動きが取れなかった。

\*

再び屋上にて

スリジエは違う意味で興奮していた昼休み。あと十五分と迫っていた。

それは睦月のことである。あの睦月とある世界の王子様と小耳に挟んだからだ。

スリジエにとって睦月が王子というのは願ってもないことだからだ。

なぜなら、王子といえは必ずれその国の国王となる継承者。そうなればもし、睦月と結婚となれば、自分は王妃。つまり玉の輿である。顔もの好み。クールな性格も好み。なによりある国の王子様。理想の男性像にぴったりはまるのだ。これは是非仲良くしなければ！ふと不安がよぎる。

あの話はあくまで噂話だ。本当かどうかは確証がない。もしも、ということだつてある。

確認とつてからのの方が安全策だ。

確認するつたつて、どうやって……。

スリジエはあることを思いつく。

そうだ！

春野弥生に聞いてみればいいんだ！

春野弥生は冬川君にもつとも近い存在。なにかしら、睦月のことはある程度までは知ってるはず。

なら、知っている事の中に睦月のウワサに関連することがあれば、あのウワサは本当だということになる。

ほんとならもつと調査して証拠を見つけた上で断定した方がいいのだけれど。

そう悩みながらも聞くことに決めた。

「ねえ、春野さん。聞きたいことがあるのだけれど」

「ほえ？ 聞きたいこと？」

なんだろう？ というような目で出迎える弥生。ぼーっとしていたのか、反応が遅れたよう。

つくづく危機管理のない女だ。いざというとき、誰かに襲われてもおかしくないような隙すきの有様ありさま。

だが、妙に疑われるのはまずいので、本心を押し殺すことにした。

「冬川君についてなんだけど」

「む、睦月さんについて!？」

弥生は目を見開いて口を開ける。下の名前で呼ぶのか。

「そう。冬川君がとある国……世界の王子と聞いたのだけれど、ホントかしら?」

「えっ。そっちの噂?」

弥生は別の噂だと思っっていたらしい。まあ今は、そんな事どうでもいいが。

「どうなの? 答えて」

「う……う、うん。本当だよ。睦月さん、よくは知らないけどあるヒトを探しにこの町に来たみたいだし。この町は初めてでいろいろ大変だーとかは言っていたけど」

スリジエはその瞬間弥生に背を向け、小さくガッツポーズする。

よっしゃ! 後はクイーンの座に向けてひとつ走りするだけよ! だが、両手が目に入ったとき、両手から屋上の床が透けている事に気がついた。

顔をしかめ、気難しい表情を見せる。

もう、時間が……ない。

わかつてはいたが、刻々と時間は迫ってきてるようだ。

やはり、魔法によって作られた身体はもろい。ましてや、一度死んだ人間が生き返るなど無謀すぎたのだ。

それに……。

春野弥生は本当に姉の仇なのか。

話していくと仇に見えなくなっていく。中身に闇の部分がないのだ。悪の心が存在していないためだろうか。仇と信じることが出来ない。

やはり、チェリーお姉様の言う通り、真実は別にあるというのだろうか。

スリジエの心は迷いが生じ始めていた。

## 弥生とねじれていく事実

葉月は屋上につながるドアの前まで来ていた。もちろん、屋上に弥生とスリジエの会話を聞くためだ。あのスリジエとかいう女、相当なつわものだ。魔力の質も高ければ、魔法の技術もずば抜けている。自分でさえも勝てるかどうかわからない。とにかく油断できない。そのためにはあの女の情報が必要だ。情報が多ければ有利なるはず。対応も出来るはず。

しかし、このまま話を盗み聞きしようとするとかならずどこかでボロが出てしまう。さらに悪ければ、盗み聞きしたことが弥生たちにはばれてしまう。そうなるてはおしまいだ。計画が丸つぶれになり、御前様に顔が合わせられない。

だったら、姿と気配を消して盗み聞きすればいい。

両手にそれぞれ紋章のような印が浮き出ると指先から透明になり、数秒には全身目に見えなくなる。これで準備は完了だ。

口元が微笑むも、廊下を歩く生徒には葉月の存在すらわからない。弥生とスリジエに気づかれぬよう、注意を払ってドアを開けた。

完全に開け切ってしまうと余計に気づかれるので、数センチばかりの隙間すきましか開けない。

隙間からはスリジエの後ろ姿と、弥生の頭部が少し見えるくらいだ。

二人は話し合いの最中らしい。

「あるわ！ あんたがチェリーお姉様を殺したんでしょ！ そんな、いい子ぶったって無駄よ！ 私には全部お見通しなんだから！」

「違う！ 私じゃない！ 違うの！」

何かもめているよう。何をもめているのか。また弥生がしでかしたのか。

弥生が口を開いた。

「あの日、確かに私は戦ってた。睦月さんをたすけるために」

「どうして、冬川君が出てくるのよ？」

「チェリーさんの相棒が、私の宝玉を狙って睦月さんを人質に取ったの。シャルロットという男が」

「シャルロットですって!？」

「チェリーさんはそれを私に知らせるべく、わざと自分がやったように見せて私と自分と戦わせたの。」

でも、誰かに狙われていたみたいで、氷の魔法で死んじゃって…

…」

シャルロットですって!？ しかも、あのチェリーは氷の魔法で殺された!？

チェリー・ムーンといえば、南の海の中で彼女に右に出るものはいないといわれる魔法の強さを持つ。もちろん、戦闘の技術だってトップクラスだ。彼女が一撃でやられたということは、彼女以上の強さを持つものということになる。それぐらいの強さであれば、リアの父親か御前様くらいだろう。

まさか、御前様が？

葉月の頬に一筋の汗が落ちる。

いや、そうだったら必ず私に知らせるはず。それが無いのは、あれは嘘という事に……。

だが、あの弥生が嘘をつくはずがないし、だとしたらあれは本当だという事になる。

葉月が考え練っているうちに、スリジエの声が漏れた。

「信じない……信じない、絶対信じない！ 私のたった一人のお姉さんであるチェリーお姉様が、あのシャルロットと手を組んでいたなんて、絶対信じない!」

あのスリジエがチェリーの妹ですって？

葉月は目を疑うような発言だったが、次第に納得していく。

だとすれば、あの魔力の強さも納得がいく。チェリーも魔力自体が強かったし、それを武器に戦っていたほどだ。スリジエもチェリーと同じ血を引いているからか、かすかに漏れる魔力からはチェリーをも凌ぐほどの強さが感じられる。それは変わらない。やはり南の海一族は油断できない。

私に計画を成功させられるだろうか？

スリジエはあのチェリーの実の妹で、魔法の技術も高い。

一方で弥生は魔法の技術は乏しいが、あの夢石の継承者だ。夢石の後ろ盾があるというのは大きい。なんたって世界を支配できるほどの力だ。

どちらにしてもまともに戦えば負けるのは確実だ。計画を成功するのは難しいかもしれない。もしかすれば自分の身までもが危ういかもしれない。でも。

目を見据え、前を向く。

たとえ無謀だとしても成功させてみせる！ だって、御前様がっ  
いているんですもの！

スリジエの後姿を見つめながら、メラメラと闘志を燃やした。

\*

スリジエが迷いを見せ始めた頃だった。屋上にあるドアからかすかな足音が聞こえた。

階段を駆け下りるかのような足音。足音は段々遠ざかっていく。後ろを振り返り、ドアのほうに視線を向ける。魔力を使い、人の気配を読み取った。

しまった！ 話を聞かれてしまった！

ちいっと舌打ちし、悔しがる。

まずい。誰かに話を聞かれていたよう。聞かれていたのだとすれば、正体がばれた可能性が高い。そうなれば、退学になるかもしれない。そうなってしまうえば何のためにこの学校に入学したのか意味がなくなる。

目の前に立つ弥生が不信に思い声をかけてくる。

「あの、スリジエさん？　どうかした？」

スリジエは我に返り、慌ててごまかした。

「えっ？　あ、ああ。何でもないわ。昼休みの時間はまだ大丈夫かしら……」って気にしていただけ」

スリジエの言葉に何の疑いもなく信じ込んだ弥生は、時計を探しまわる。

「そついえばそうだね……時間、まだ大丈夫かな……。まだ授業が残っているから早めに切り上げないと」

弥生が時計を探しまわっている間、再び屋上の入り口を振り向く。神経を集中し魔力を消費しながら、足跡をたどり立ち去った人物を追う。

屋上につながる階段。階段を降りた先にある三階の廊下。

そこで途切れてしまう。まだそれほど遠くに行っていないようだ。それなら……。

確信を持ったときだ。

「スリジエさん？　具合でも悪いの？」

誰かに声かけられたためか、集中が途切れてしまった。その声はもちろん春野弥生だ。

「スリジエ……さん？　ドアがどうかしたの？」

眉間にしわをよせて心配そうにする弥生の顔が映り、不信に思われていることに気づく。

そりゃあ、ずっとドアの方角をにらんでいたら怪しむに決まっているだろう。

「別に……なんでもないわ」

スリジエはそっけない態度で視線を逸らした。これじゃあ、余計

に心配させてしまいかもしれない。

案の定、弥生がさらに不安そうな顔で覗き込もうとする。

「どこか具合が悪いんじゃない？ この前も熱中症で倒れたし」

「大丈夫よ。あんたに心配されるなんて余計なお世話だわ」

そう。仇に心配されるなど余計な事だ。それなら正体がばれたほうがまだましだ。

ふと考えた。もしクラスメートに正体がばれたらどうなるだろうか。

この世界の者は海の世界に住む住人と違って、ファンタジーなど架空のものを信じない者が多い。

「絶対嘘をついている」

などといわれて終わりだ。あとはうそつき呼ばわりされるだけだろう。

私も、そんなことになってしまふのだろうか。うそつき呼ばわりされるのだろうか。

以前のように皆に遠のかれていくのだろうか。

きゅっと口を閉めた。悔しがるのかのように。

クラスメートは私のこと、信じてくれるだろうか。

雰囲気は皆、いい人そうだった。特に男子軍団は。まあ、転校生だからってうかれているだけだろう。さほどたいしことではない。

だが、後ろ盾があるというのは大きいのだ。クラスメートがいてくれるというのは。

春野弥生のように。弥生はクラスでも人気者のようだ。それほど後ろ盾が大きいのだ。

私は……私は何があるの？

何かみんなを信頼してくれるようなこと、あるの？

病弱で無駄に頭がいいだけの私が。

スリジエの頭の中に頭痛が走る。誰かに脳をつねられているよう

な激しい痛み。

この感覚はまさか、これが『代償』といわれる……………、

スリジエの意識は再び異空間へと閉じ込められた。

\*

もうまもなく昼休みがあと十分ほどで終わろうとしていたころの屋上。

弥生はスリジエの顔色に変化があったため、また倒れやしないか不安でいっぱいになっていた。

なにかあったのだろうか。見た目は健康そうに見えるが、肌が色白で病弱そうに見える。

本人は大丈夫だと言ってはいるが、余計に不安になってくる。

体調が悪くなったりしているんじゃないか？ って。

お人よしだつて言われるかもしれないが、それでもいい。

具合の悪い人を放っておくことなんて、できない！

たとえそれが戦った敵の妹だとしても！

そう、いえば…………スリジエさんって。

ちらりとスリジエを顔を横目で見る。

そういえばスリジエさんも…………人魚、なんだよね？ じゃあ、私のことも知ってるってことでもいいのかな？

いや、でも私の名前しか言っていないから、全部が全部知っていないとは限らないし。

もしそうだとしても、私は正体を明かすことはできない。

人魚はヒトに正体を告げると泡になって消えてしまう。  
たとえそれが人間になりすました同類の人魚だとしても。相手が  
人魚だと知らない限り。

気づかせることは出来る。しかし、自分の口で言うことは許され  
ない。

胸がすつきりしない。正体を隠したまま、同じ同類であろうスリ  
ジエさんとお話するなんて。

はあ、と暗い顔でため息をつく。

スリジエさんとお友達になりたい。でも、南の海と北の海は敵対  
同士。仲良くなることは許されない。王女であってもだ。

私は前世でも王女という肩書きがあるせいかな、友達と呼べるもの  
は出来なかった。

簡単にいえば、王族の者達が許さなかったのだ。いずれ王国を継  
ぐという王女が友達など作ってうつつを抜かすなど許せるはずがな  
い、と。

もちろんそれは南の海だって同じこと。だとすればスリジエさん  
だって……………。

だからこそ、スリジエさんとはお友達になるべきだ。

たとえ禁忌を破ってでも。

でも、スリジエさんはお姉さんを殺したのは私だと思い込んでい  
る。

私はやってはいないと理解させないとまず友達にはなれない。

でも相手はチェリーの妹だ。どう立ち向かっていけばいいのだろ  
うか。

顔を上げたとき、黒い物体が弥生の左頬をかすれる。

闇に吞まれていきそうな、漆黒の色。これは、闇の魔法！

スリジエが放った魔法である。だが、私は今は、何もしゃべって  
いないはず。

それなのにどうして……………。

「それなのにどうしてって顔してるわ」

スリジエの言葉に動揺し、しどろもどろになる弥生。

何か……変。まるで、別人のよう。

そう、もう一人の別の人格が入れ替わったような感じ。雰囲気も、目の色も変わっていた。私の気のせいだろうか。

「仇であるあなたに心配される私の気持ち、わかる！？ 侮辱しかないわ！」

スリジエの気迫は中庭で戦ったあのときによく似ている。

「絶対許さない！ チェリーお姉様を殺したあなたなんか！」

ど、どどどど、どうしたらいいのかな！？

生憎屋上はスリジエと弥生の二人だけ。内緒で出てきたので誰かがやってくる見込みはない。葉月は自分よりもお昼休みに時間をつぶすタイプのため、屋上に来るかどうかが不明だ。もちろん、睦月にも内緒でやってきたから来てくれるかどうかは……………。

スリジエが闇の魔法の構えをし始めた。

やばい！ 闇の魔法が来る！

だが、アクアシールドを張ろうとしたときには、闇の魔法は放たれていた。

黒い球体は空を切り、真っ先に腹部のど真ん中に命中。弥生はその場でひざまづいた。

っ、強い！

利き手の右で腹部を押さえるも痛みは晴れない。

以前受けたときよりも、格段に威力が上がっている。このままやられ続けたらほんとに倒れてしまう。まずい。

でも、スリジエと戦うなんて出来ない。スリジエはチェリーの妹だ。スリジエにはまだチェリーの伝言を伝えてすらいない。伝えな  
いまま自分が倒れてしまったら今度こそほんとに……………。

かといってまた、逃げ続けるのは良い案とはいえない。体力の無駄なだけ。

けれど私はあんまり魔法は覚えていないし。  
弥生の目はさまようように泳いでいた。

## 弥生と悪化していく事態

睦月は屋上へと続く階段前まで来ていた。刻々と昼休みが終わる時間が迫り始めた頃。

その時だった。かすかに残る魔力を読み取る。あきらかに尋常ではない魔力。あの夢石と同等の強さを持つ。スリジエだろうか。

数秒間考え込み、首を横に振った。

いや、違うだろう。もしスリジエであれば、弥生の魔力も残っているはず。それが無いということは、二人はまだあの屋上にいるということになる。だとすれば、この魔力の気配は誰のものだろうか。なにげに階段に目を向けたとき、誰かが階段から降りてくる足音が響く。睦月は廊下の窓側に移動すると、顔を見られないように後ろを向ける。

ちら見したときに顔を一瞬だけ確認できた。

あれは秋村葉月だ。その顔は険しそうに見えた。

何故があいつがここにいるんだ？ 秋村なら教室にいたはず。

もしかして、屋上で何か起きたのか？ だとすると一刻の有余ゆうちよもない。

急がなければ。春野のことが心配だ。

スリジエが暴走しなければいいが……。

葉月に見つからないよう、忍び足で階段に近づく。

今度は葉月周辺で別の声が聞こえた。聞き覚えがある。同じクラスの誰かだろうか。

「葉月、ちょっと話があるの。いいかしら？」

その声は夏野皇月だ！ 二人は確か犬猿の仲で口も聞かないほど

と聞いたが。

「臯月？ 何の用よ？ 今忙しいのよ。あとにしてくれる？」

葉月の声は不機嫌そうだ。

臯月が話を続ける。

「今じゃなきや、駄目なの。ちょっと……伝言をね」

伝言、だと？ どういう意味だ？

「伝言？ ……わかった。でも少しだけよ」

二人が距離を置くように階段を下りていった。

睦月はため息つくと、額の汗を右手の甲でぬぐう。

なんだあの二人は？ 本当に仲が悪いのか？ 今の会話を聞いても仲が悪いようには見えないが？ まるで仲間同士で連絡を取り合うわけじゃないが、そんな感じのような雰囲気だったな。

あの二人にはきつと裏があるかもな。

一応調べておく必要があるそうだ。もしかすると、黒の人魚族と関わりがあるかもしれぬ。

睦月は不快感を抱きつつも、重い足取りで階段を上って行った。

\*

少し時間を戻して屋上が続く階段では。昼休みが終わる十分前。

葉月は階段を下りながら考えていた。スリジエのことである。

もし、スリジエが睦月さんに好意を持っているとしたら、まずい。相手が悪い。

だが。

いきなりやってきた女なんかよりも、少しでも長くいる私のほうが睦月さんのことをよくわかっている。まあ、さすがに弥生には負けるが。

考えていたときに、葉月の前に真剣な眼差しまなびの夏野皐月が現れる。  
「葉月、ちよつと話があるの。いいかしら？」

皐月が一体何のようだ？ 報告ならまだ先のはずだが。

「皐月？ 何の用よ？ 今忙しいのよ。あとにしてくれる？」

葉月は不機嫌そうに答えた。

何故は私が皐月なんぞの話の聞かなければいけないのだ。それだけでも腹が立つ。

皐月が話を続ける。

「今じゃなきや、駄目なの。ちよつと……伝言をね」

伝言つてことはなにか事態が変わったときに伝えられる。

まあ、聞いてみる価値はあるかもしれない。

「伝言？ ……わかった。でも少しだけよ」

二人が距離を置くように階段を下りていった。

二人は中庭までやってきた。もちろん人目につかない場所にいる。  
「伝言つて何？ 報告ならまだ先のはずでしょ？」

葉月の言葉に皐月は微笑み口にする。

「あの方……御前様からあなたにとって、伝言を預かってきたの。聞きたい？」

葉月は目を見開き、驚きの声をあげた。

「ご、御前様から！？ ちよつ、どういふことそれ！」

御前様が私に伝言がある？ どういふこと？ 何があつたといふの？

呆然と口を半開きにする葉月をよそに、皐月が小悪魔のような笑みで伝える。

「例の計画だけど、葉月、あんたにはおりてもらつことになつたから」

なつ……それはどういふことだ？ 私が計画からおりる？

「お、おりるっ？ わ、私が？ ちゃんとわかるように説明しなさいよ！」

「まあ、つまり……」

皐月は葉月に近づき、耳もとでささやいた。

「用済みってことよ」

葉月皐月の言葉に、頭の中は真っ白となる。

「用……済み？ どうして……」

御前様からの伝言が……私はもう必要ないって……。

皐月は葉月の顔を見るなりにやりと笑う。

「どうしてって、簡単にいえば、計画をまったく進めていないからよ。弥生を憎んでいるとはいえ、少し近づきすぎたわね。それに、計画の目的である全然『夢石の継承者』からはずすことが出来ていないし」

葉月から離れ、振り向く。

「さすがの御前様も相当お怒りのご様子だったわよー。だから、代わりに私が計画を進めることになったの」

葉月が否定するように大きく横に首を振る。

「う、嘘よ！ 御前様がそんなこと、言う訳……」

だが、皐月は否定しない。

「嘘じゃないわ。これが、事実よ。ということで例のカード、私がいただくわね」

いつの間にか葉月から盗み取ったカードを、左手に持っている皐月。

あのカードは例の計画を進めるための重要なキーである。

「一応、伝言はしたわよ。そういうことで、じゃ」

私は……もう、いらぬ。御前様は私をいらぬと……。

歩き去る皐月をただ単に見つめながら、立ち尽くす葉月だった。

一方、屋上では激しい攻防戦が続いていた。

しかし弥生はスリジエと戦うのを迷っていた。本当にスリジエと戦うのが良いことなのかを。

スリジエはチェリーの妹だ。チェリーが一番、大切に思っていると考えられる人物。

そんな人と戦っていいのだろうか？ ちゃんと伝えるべきものはちゃんと伝えておくべきなのではないだろうか。

“もし、妹に会うことがあるのならば、約束、果たせなくてごめんなさいと伝えてほしいの”

最期に耳元でチェリーに言われた。

その言葉を伝えるためにも、戦わずにスリジエさんの暴走を止める！

その時だった。

久しぶりにラリアの声がささやいた。

『弥生っ！ お願い、スリジエと戦って！ 今のスリジエは敵よ！』

今の……スリジエさんは、敵……？

一瞬、頭の中が空っぽになった感覚。なにを言っているのか、わからない。

チェリーも私が戦っているときに亡くなった。それでもし、スリ

ジエも同じようになっちゃってしまつたら……。

出来ない！ 私には……出来ない！

弥生と大きく横に首を振った。

その時、スリジエと目が合ってしまった。だが、スリジエの様子が何かおかしい。

頭を抱えてもがくように、座り込んで苦しんでいる。息遣いも荒い。どうしたというのだろうか。

もだえ叫んだと思えば、おなかを抱えて苦しむ。どこかおかしい。病弱だからとかそういう問題ではなく、また別の何かが起きているような感じだ。まるで別人格に変わったスリジエが壊れたように見える。

何が起きているの？ 何があつたの？ どうして？

スリジエさんに声をかけたほうがいいだろうか？

弥生は意を決して、スリジエに声をかけてはみるが、

「スリジエさん、大丈夫……？」

「うるさい！ 黙れ！」

相手にしてはくれず。

まあ、当然と言うべきだろうか。

スリジエは赤い眼光で雄たけびを叫ぶ。叫んだ直後、現れた黒い玉が変形し剣に変化する。その剣を手に取り弥生をにらみつけた。

何をするつもりなの？

弥生はごくりとつばを飲み込むと、後ずさりする。いやな予感が背中をよぎった。

明らかに攻撃の技術が上がってきている。もちろん、威力もあがっているだろう。もし、それに当たってしまったら、今度は体力が減るところでは済まされない。

弥生が不安なのはそれだけではなかった。

黒い剣は青いもやを発しながら威嚇していた。それをそのまま自分に向けてくるなんて……。

案の定、弥生の予想は当たっていた。

スリジエが剣を強く握り、弥生に迫ってくる。

「春野弥生 絶対、許さない！ チェリーお姉様の仇！」

やばい！ こっちにくる！ な、なんとかしなきゃ！

弥生は必死で誤解を解こうとする。

「違う！ 私じゃない！ 私はただ……チェリーが心配で駆けつけただけで………」

「うるさい！ あんたなんか、あんたなんか 死ねえ！」

聞く耳すら持たない。

ど、どうしよう！ このまま攻撃受けて、倒れちゃったりしたら……… 今度は生きて帰れるかなあ。

や、やっぱり、誰かに相談して助けを求めるしか……でも、卑怯だとかスリジエさんに言われたりしたらやばいし、かといって、攻撃をまともに受けるわけにはいかないし……。

ああっ。どうしたらいいの？

慌てふためき、屋上を見渡す。目はしどろもどろになる一方だ。

「春野弥生、死ねえ！」

スリジエの走るスピードが増す。弥生はスリジエの攻撃を左によけ、走り出す。

っていうか、これじゃあ中庭のときと変わらないじゃん！

自分に言い聞かせるが、走り出した足が急に止まるはずもない。

当然、攻撃をよけられた側も攻撃をさらに加速させていく。

「春野弥生、逃げるな！」

「そ、そんなこと言われても、あ、足が勝手に動いて………」

弥生がつぶやいたとき、屋上に落ちていた小石に躓きこけてしま  
う。

まずい！ 今こけたら、攻撃を受けちゃう！

「逃がすものか！」

スリジエは剣を空に掲げ突進してきた。

ど、どうしよう！

弥生の身体は恐怖で動かない。また、倒れてしまうのだろうか。

今度は学校の屋上で……。もう、どうしようもないの？  
数秒目を閉じ続けるが、攻撃が弥生に当たった気配がない。どう  
いうことだろうか。

おそろおそろ目を開けると、弥生の前に倒れる睦月の姿。

「む、睦月さん！ ど、どうして睦月さんが！？」

おそらく、弥生の代わりに攻撃をくらってしまったらしい。

「睦月さん！ 大丈夫？ しっかりして！」

睦月が目を開き、身体を自力で起こす。

「だ、大丈夫だ……。今はスリジエをとめることだけ、考える」

睦月はそういつと立ち上がり、手中に炎を出しそれを使って幻影  
を作り出した。

弥生がみたことのあるチェリーのシルエット。スリジエのお姉さ  
んだ。

そうか！ それを使ってスリジエさんを止める気なんだ！

睦月さんはスリジエは必ずなにかしらの反応はするだろうと読ん  
だんだ！

炎で作りに出されたチェリーの幻影にスリジエは戸惑い動きを止め  
る。

「チェ、チェリー……。お姉さま？」

睦月の読み通りだ。スリジエが手から剣を放す。剣は床に落ちた  
瞬間、一瞬で消え去った。

幻影は役目を終えたかのように小さくなりながら消えていく。

弥生はスリジエに声をかけた。

「スリジエさん！ スリジエさん、聞こえる？」

睦月と弥生はスリジエが正気に戻るのを待った。

## 弥生と少女達のそれぞれの思い

スリジエの意識は黒い箱の空間に閉じ込められていた。音も映像もない。何が起こっているのかさえ、わからない。

だが、これが復活した者が払うべき『代償』なのだろう。

たとえ復活したとはいえ、ヒトは完全に復活することは出来ない。それが魔法で復活されたとしても。

だからそれを補うためのものが必要になる。それが『代償』だ。まさか私の代償が『人格を制限すること』だなんて。

こんな暮らしがつつと死ぬまで続くのか。こんなことが何度も引き起こされ、制限され続けるのか。

だが、そう考えていた矢先のこと。空間にわずかな亀裂が入り白い光が漏れ出す。それがきっかけとなって、箱はこぼれるようにみるみる崩れていく。そのままスリジエの意識は光の中へと引きずり込まれた。

スリジエはまぶしさのあまり目を閉じてしまう。

再び目を覚ましたときには学校の屋上に戻っていた。まるで強制的に引き戻されたような感覚だ。

その時、一番初めに弥生の声が入ってきた。

「スリジエさん！ 元に戻ったんだね！ 良かった、本当に良かった！」

自分を心配するような声。仇のくせして私に始末されるという危機感がない。

それどころか私を心配している。どこまでもお人よしな奴だ。

そんな弥生の横には睦月までいる。どうしてまたここにいるのだろうか。

もしかすると、私が春野弥生を呼び出したというのを嗅ぎ付けてやっってきたのだろう。

さすがはもう一つの世界の王子ね。

睦月はあまりしゃべろうとはせず、

「無事に元に戻ったんだな」

とだけつぶやく。

まあ、あんまり親しいというわけじゃないから当然だろう。

「どうして、元に戻したのよ……元に戻せだなんて一言も……」

それだけしか言葉に出せなかった。言葉に出そうと思っても急に戻された衝撃でうまく言葉が出せない。

「えっ。で、でも、睦月さんがスリジエさんを元に戻したほうがいいって。あのまま暴走し続けると、身体にもすごい負担がかかっているから危険だって」

弥生の言葉に思わず、「えっ」と声を漏らしてしまう。

ものすごい負担がかかる？ どういうことだ？ もちろん、本来の人格は別空間に閉じ込められるため、自分の体がどうなっているとか、負担がかかっているなど知るはずがない。

「それって一体どういうこと？ 春野弥生、あんたが私を元に戻したんじゃないの？」

「ち、違うの……睦月さんが炎でチェリーさんの幻影を見せて動きをとめて、元に戻したの。」

たとえ別人格であってもチェリーを大切に思う気持ちは変わらないだろうからって」

弥生の話に付け足すかのように睦月がつぶやく。

「まあ、その前に春野に対しての攻撃が上がっていたけどな」

あがっていた？ 攻撃の精度、つまり攻撃のことだろうか。

睦月はスリジエの心の声が聞こえていたかのように話を続ける。

「ああ、そうだ。春野の話によると、前よりも数段とあがっていたそうだ」

つまり簡単にいえば、弥生を憎むあまり心と魔法がつながり、威

力をあげてしまったらしい。

闇の魔法は魔力に反映されるが、もちろん、憎しみや悲しみの心にも反応する。

それがつよくなりすぎて威力をあげ、ついにはコントロールできなくなるまでに達してしまった。

それをぶつけるかのように春野弥生に攻撃を繰り返していたという訳か。

みじめだ。自分がやったわけじゃなく、もうひとつの人格が攻撃を繰り返すなんて。

まるで本来の人格は『もう一つの人格を発動させるためのスイッチみたいなもの』じゃないか。

「スリジエさん、どうか……したの？」

心配そうに眉をひそめる弥生に気がつき、何事もなかったかのように振舞う。

「別に。……何でもないわ。っていうか、何故私があんたに心配されなきゃいけないワケ？ おかしいでしょ！」

突然興奮しだしたスリジエをなだめるように睦月が話しかけた。

「春野はただ単にまた倒れないか心配なんだ。図書館のときのように」

「そ、それは……」

スリジエは反論できない。それは確かにそうだ。あのときは歩きすぎて体力がなくなってしまったのと、暑さにやられたことだ。たとえ日傘をさしていたとしても、どこからか太陽の光は体に当たる。完全に防ぐことは難しい。つまり倒れないという保障はないということだ。今のスリジエには。

「だからといってあまり興奮するのも良くない。あまり体が強いほうではないのだろう？ だったらなおさらだ。なるべく興奮しないよう抑えたほうがいい」

「どうして、そこまで……」

「少し心配というか、不安だったからな」

睦月は気まずそうな顔で目線を逸らした。

「どうやら弥生のことがきになるらしい。まあ、私には関係ないが、それにしても、どうして冬川君はそんなにもこんな自分を気にしてくれるのだろうか。」

「そう考えると体がぽかぽかと温くなる。この感情はなんだろう。初めて味わう感情。」

「これが、これが恋。私、私は。スリジエは何かを決心したのか、弥生に指を突き付け宣戦布告する。」

「春野弥生！ 私、今日からあんたとは恋のライバルになりそうだわ！」

私、あんと同じ人を好きになっちゃたみたい。だから、容赦なくアプローチしていくわ！ 覚悟するのね！」  
スリジエたちがいる屋上には不穏な空気が流れていった。

\*

学校が終わり自宅に戻ってから春野弥生はお風呂に入浴中だった。学校から帰ってすぐのお風呂が日課で、時間は入ってから三十分たち五時半となっている。普通はシャワーのみで済ませ、髪や体は夜のお風呂で洗う。しかし考え事で頭がいっぱいになり湯船につかったままなのだ。

それはお昼休みが終わる頃、屋上でスリジエが放った言葉。

春野弥生！ 私、今日からあんたとは恋のライバルになりそうだわ！

私、あんと同じ人を好きになっちゃたみたい。だから、容赦な

くアプローチしていくわ！ 覚悟するのね！

それってつ、つまり睦月さんのことを……。

深いため息を無意識につく。

まさかスリジエにそんなこと言われるなんて。思いもしなかった。私は、私は……。

一体どうすればいいの!?

自分でも落ち込んでいるのか、悩んでいるのか、わからない。

でも確実いえるのは今後スリジエさんとどう接していけばいいか迷っているということだろうか。

弥生は風呂場の天井を見上げてみた。湯気のせいか、水滴がつき始めている。

再び視線を戻すと二度目のため息。

どうすればいいの？ どう接していけばいいの？ 明日から本格的な授業が始まるが、スリジエとは同じクラス。授業はほぼ一緒に教室で受ける。どんな顔すればいいのか。

スリジエは死んだチェリーの妹。チェリーが一番大事にしている少女。その少女は私をチェリーを殺したと思っている。

しかもスリジエは睦月のこと好きだと言い出してしまった。最初は友達になりたいって思っていた人がライバルみたいな関係になるなんて。さすがに友達になりたいなどうかつに言い出せなくなった。だが友達にはなりたくない。境遇がどこか似ているスリジエさんとは分かり合えるかもしれないのに。

けれどこのまま野放しにしておくとは今度は睦月を取られてしまうという危機が生まれる。

睦月さんは自分のことを『好きだ』と言ってくれた。初めて男の人に告白されてうれしかった。それなのにスリジエさんに取られたら私の立場っていうのが……。

それはそれで嫌だ。

かといってスリジエさんとライバルになるつもりは……。頭の中がパンクしそうだ。私の中に天使と悪魔がささやく。

スリジエとライバルになって、スリジエを蹴散らしちゃいなよ！

スリジエをライバルだと認めるべきだという悪魔。

駄目よ。まだ相手のことをよくわかっていないのに安易に認めちゃ駄目。

一度話し合ってみるべきよ。

話し合ってみたほうがよいと提案する天使。

一瞬、悪魔に傾けた。しかしよく考えてみた。

そもそも今日の昼休みはスリジエと話をするはずなのが、途中からバトルになり睦月がとめてくれて何故かスリジエに宣戦布告されたまま終わった。まとも話をしていない。詳しい話を聞いてから判断した方がよさそうだ。

弥生は天使の意見に賛成することにした。私の中にあつた悪魔は消えうせた。

スリジエとは恋敵になるかもしれない。またスリジエさんに攻撃される可能性もあるだろう。

それでもスリジエさんと友達になりたい！そしてチェリーさんの伝言を伝えてあげないと！

湯船から立ち上がると天井を仰ぎ見ながら拳を握った。

\*

夕食が終わった秋村家の自宅。葉月は自分の部屋で考え事をして

いた。ベットに仰向けになり複雑そうな表情で天井を見つめる。

私が用済みだなんて……。

臯月に呼び出されたかと思っただら自分は用済みだという、計画からはずされる話だった。

今でも信じられない。御前様が伝えるようにと臯月は言っていた。ということは御前様が判断したことということになる。御前様の判断は絶対だ。誰であろうと逆らう事は出来ない。もちろん葉月さえも逆らえない。

ということは用済みは本当の事、事実ということだ。

でも、ありえない。私が用済みだなんて。計画はちゃんと進んでいたはずだ。もちろん幹部の皆さんや御前様にも報告は毎回してある。それなのにはずされるなんて。

信じたくない。信じられない。

でも……。

嘘じゃないわ。これが、事実よ。

臯月は嘘じゃないと。事実だと言った。これが本当に事実ならば認めるしかない。

それでも信じたくない。御前様からの伝言が用済みの伝言だなんて。

御前様、どうしてですか？ どうして私があずされて、臯月が代わりに任務を遂行するのですか？

何かの間違いですよ？ 私は、私は本当に用済みなのですか？ 聞きたい。御前様の口から本当のことが聞きたい。そして嘘だと行ってほしい。

それはでたらめだと。

連絡したい。御前様と。

けど、連絡するために必要な例のカードは皐月が持って行ってしまった。

これじゃあ、連絡しようがない。

連絡法としては小型の通信機に最新型のカードをさしこみ、御前様につながる番号を四桁入力すればつながる。しかし、あいにく手持ちには旧型のカードしか持ち合わせていない。

もちろん、最新型の通信機に旧型のカードを差し込んでも起動はしない。

けれども元をたどれば同じ通信機に差し込むカード。もしかしたらという可能性もある。

ごくりとつばを飲み込み、恐る恐るカードを持った手を通信機に近づける。

少しずつ、少しずつ前へと進める腕。緊張した手に汗がにじみ出てきた。

やばい。機械は水に弱い。ちょっとした水でも壊れてしまう。急いで差し込まないと。

目前に差し掛かったところで見えないバリアがカードを弾き飛ばす。弾き飛ばされたときにわずかに流れた電流。まるで完全に旧式カードを拒んでいるかのような反応。

やはり駄目か。この通信機は最新式のカードでなければ起動しない。

それはわかっていたのに。わかっていたのに。連絡をとりたいたいという衝動が抑えられない。

葉月はもどかしい思いを抑えたまま通信機を凝視し続けた。

\*

住人が寝静まったと思われる真夜中。車ひとつ走らない国道。街

頭すらない暗黒の歩道。

周りの住宅地は明かりをつけているところはない。

そこに廃墟と化した五階建てのビルで人に見つからないよう入っていく少女。葉月に御前様の伝言を伝えた夏野皐月。背中には小ぶりのリュックが背負われている。

三階まで階段で上った直後座り込む。リュックをおろし、小型の機械を取り出す。

葉月が持っているのと同じ通信機である。シャツの胸ポケットから葉月から奪ったカードを取り出す。

そのカードを差込口に差込み、電源スイッチを入れる。通信機が起動し映像が映し出される。映像の中には会議室と思われる場所が映し出された。その映像は一瞬で消え代わりに男性の顔が映される。表情は硬い。歳は五十代半ばといったところだろうか。

皐月は映像越しで男性に頭を下げた。

「すみません、御前様。カードは取り戻したのですが、例のモノは手に入れず……」

男性は表情が硬いまま話す。

「そうか、やはり駄目であったか。まあ、よい。葉月のもっているものはそのうち奪えばよい」

「それで、例のことは一応葉月に伝言しておきました」

「そうか。それならいい」

男性の声に悲しみやさびしさは見受けられない。

「それで例の計画は順調かね？」

「はい。もうレベル三まで達し、あと少しでレベル四に到達するころです」

「それはいい。計画さえ成功すればあとはどうでもいいが」

皐月は御前様の言葉に疑問を感じた。まるで計画以外のことは興味ないって感じた。

それじゃあ計画を進める人間も興味ないってことに……。

それよりもあの葉月が計画からはずされたなんて考えられない。

葉月は計画をすすめるメンバーの中でもっともエリートラインを走る優秀なメンバーでもある。そんな葉月を外すなんて計画に支障が出ないか不安になるくらいだ。

でもまあ、葉月が失態を犯してしまったことは事実。それは仕方がないこと。

御前様と呼ばれた男性が皐月に命令を下した。

「皐月、次のことだが、春野弥生とスリジエという少女を監視してもらいたい」

「弥生とスリジエ……？ 弥生はまだわかりませんが、何故スリジエまで監視を？」

「実はスリジエはあのチェリーの妹らしく、何をしでかすかわからないのだ。何せ魔法で強引に復活させた死人だからな」

皐月は御前様の話に形だけうなづき、言葉を発す。

「……はあ、かしこまりました。次の任務も追行していきたく存じます」

報告を終えるところで御前様との通信が途絶えた。

今頃葉月はどうしているだろう。御前様と連絡を取りたくてそわそわしてなかるうか。

まあ、連絡できたとしても計画のメンバーに入ることは難しいだろうが。

葉月の様子を考えながら次の作業に取り掛かった。

\*

次の日の海堂中学校では本格的に授業が始まった。

弥生も前学期と変わらず登校するが、明らかに前学期とは違うところがあつた。

スリジエと睦月という転校生が入ってきたことだ。睦月が転校し

てきたのはうれしい。

もちろん、スリジエが転校してきたのも心底喜びを感じる。

だが、昨日スリジエに言われた言葉がいまだに頭から離れず昨日はよく眠れていない。

春野弥生！ 私、今日からあんたとは恋のライバルになりそうだわ！

私、あんたと同じ人を好きになっちゃたみたい。だから、容赦なくアプローチしていくわ！ 覚悟するのね！

ああ！ どうしたらいいの！

一応スリジエと話をすると決めたはいいが、やっぱりどうすればいいか迷ってしまう。

こういうのはやっぱり友達とかに相談した方が良かった系？

顔が汗まみれになりながらごくりと生唾を飲み込んだ。

でもなあー、これはあくまで私とスリジエさんとの問題。第三者を巻き込むのはちょっと……。

弥生はこのあと難しい顔のまま午前の授業を受けた。頭がいつぱいで授業に手をつけられずそのまま午前の授業が終了。

もちろん悩みが抜けることはなく、お昼休みを迎える。

これからどうしよう。スリジエさんになんて言おうか……。

最初にどうやって声かけられるかが問題になるが……。

右肩に手を乗せられ声をあげる。

「ひゃあああ！」

肩をすぼめるとゆっくり顔を後ろに向ける。

まさかスリジエさんが？

顔を見上げた瞬間全身の緊張が解かれた。そこ立っていたのは秋村葉月だった。

「なーんだ。葉月か、びっくりした」

葉月が弥生の言葉に不機嫌そうにしながらつぶやく。

「びっくりしたのはコツチよ。何、急に声をあげちゃって。私が心臓止まりそうだったわ」

「ご、ごめんなさい……」

小さくうずくまり反省すると再び葉月の顔を見上げる。

「どうしたの？ 急に。何かあった？」

「どうしたもこうしたもないわよ。弥生、あのスリジエとかいう女、睦月を狙っているって噂が立っているらしいの」

「えっ。あっ、そ、そうなの？」

弥生はスリジエが睦月のことを好きだと知っているため動揺が隠せない。

葉月は呆れた顔で弥生を見おろす。

「そうなの？ って相変わらずのん気娘ねー。スリジエって結構の美人って評判でしょ？ しかも睦月くんも顔がいいし、『お似合いのカップル』になるじゃないかってみんな焦ってるわ」

お、『お似合いのカップル』か……。

た、確かに……。

「それに、睦月君はどこかの王子様という噂もあるらしいからみんな睦月君をゲットしようと思死なのよねー。さすがについていけないわ」

む、睦月さん、モテモテなのね……。

弥生の心に氷の刃が突き刺されたような、胸の痛みを感じた。

む、睦月さんはスリジエさんのこと、どう想っているのかな？

もしかして睦月さん、心が変わったとか？ ないよね……？

「あら？ あのスリジエとかいう女、睦月君に近づいているっぽいわね」

葉月が発した言葉に反応すると、急いでスリジエの姿を探す。

数秒かかってスリジエの姿を発見。葉月の言うとおり、睦月の席に一直線だ。手には何やらお弁当のような包みを持っている。

私、あなたと同じ人を好きになっちゃたみたい。だから、容赦なくアプローチしていくわ！ 覚悟するのね！

ほんとにアプローチし始めた！？

まさかと思いつながらスリジエを観察する。他の女子も弥生と同じようにスリジエを凝視していた。

スリジエが睦月の前で止まると、睦月に一言。

「私と一緒に弁当食べない？」

す、スリジエさん、ホントにホント、アプローチをし出した

！

ど、どどどど、どうしよ

！？

口を開けたまま遠くでスリジエたちを見つめながら、石のように固まる弥生だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6409w/>

---

弥生ともう一つの世界

2011年10月4日03時35分発行